

「第3回芝不器男俳句新人賞 最終選考会」議事録

日 時：平成22年6月20日（日）13：00～16：45

場 所：ひめぎんホール 第6会議室（愛媛県松山市）

出席者：70名（運営側、来場者含む）

〈選考委員〉大石悦子（委員長）、城戸朱理、齋藤慎爾、対馬康子、坪内稔典

〈参 与〉西村我尼吾（進行）

〈そ の 他〉応募者、マスコミ、一般来場者、主催者

※ 最終選考会の実際の討議では、応募者の受付番号と応募作品の句番号はともに、〇〇番という表現をしていましたが、本文では文章上、混同を避けるために、受付番号を「△△番」、句番号を「□□句目」という表現に統一しています。

◎開会

◎開会あいさつ：財団法人愛媛県文化振興財団 理事長 佐藤陽三

◎芝不器男記念館館長紹介：芝不器男記念館 館長 名本昭一

◎選考委員・参与紹介

◎事業概要・選考経緯等説明：財団法人愛媛県文化振興財団 常務理事 三原正實

西村 それではこれから選考プロセスに入りたいと思います。選考プロセスは2段階に分けて行いたいと思っています。基本的にこの予選を通過された方々は、高い水準の俳句レベルをもうすでに世の中に問うておられる大変立派な可能性を持った作家の方々であります。

まず、この予選通過者30名、これらの作家についてそれぞれの選考委員から一人5名の推薦をいただき、そしてその5名の作家について、なぜ我々委員が推したかというご説明をいただきたいと思っています。これはまさに、この5名の先生方が、この全作品の中で作家をどのように評価したかということを経史的に記録に残すプロセスでございます。

それではこの、先ほど事務局からご紹介がありましたとおり、大石委員長、城戸朱理委員、齋藤慎爾委員、対馬康子委員、坪内稔典委員の順番で、それぞれのご推薦を発表していただきたいと思っています。それではよろしく願いいたします。だいたい一人10分を目途に、約1時間ぐらいでこのプロセスを終わりたいと思います。よろしく願いいたします。

大石 大石悦子でございます。トップバッターでお話をさせていただきます。応募者の方は皆さんドキドキしてらっしゃるかと思うんですが、私の方が数倍ドキドキしてるとしています。作品に即して感想それから推薦した理由やなんかをお話してきたらと思います。

まず、5編のうちの1編、12番をいただきました。先に作品をご紹介します。4句目〈抽斗にモデルガンあり雁帰る〉、それから9句目〈朝桜ダムの放水はじまれり〉、40句目〈向日葵や極左の赤いペンキ文字〉、43句目〈蛇殺

め来て静かなるぼんのくぼ)、51句目〈リネン室にシーツ山積み夏をはる)、それから61句目〈桃一個ナイフ一本冷やしおく)、それからまだありまして、65句目〈月明に大胸筋の張りにけり)、こういうところへんの句をまずチェックいたしまして、そしてこの中から作者っていうのをどんな方かっていうことを想像するのがとっても、あの、作品を通して、作品を読むことの楽しさにもなるわけですけども、非常にこう、素材的に、現代性っていうんでしょうか、現代の若者っていうんでしょうか、若い方の実像のようなものが見えてまいりまして、そしてそれが感覚的、それからこの現代をどういう風に生きてらっしゃるかというそういうところまで思いが行くような、そういう作品ではなかったかと思えます。

季語の扱いなんかも確かですし、それから詠法と云うんでしょうか、詠み方の技法、テクニック、それなんかも危うげのないところが大変この方は手慣れた人だろうというふうに、上手い人だろうというふうなことを思って、12番まずいただきました。

その次は18番の句、これにもたくさん印をしたんですが、この方の場合、わりと他の作品を見ますと生活の身の回りのことを詠んだ作品が多かったんですけども、この18番の作品っていうのはご自分が多分住んでらっしゃるその土地の風景だとか、自然詠に近い、そういうものが目立って風土性とまではいかないですけども、この方が住んでらっしゃる風土というものが見えてくるような、そういうところに好感を持ちました。

作品を読んでみますと2句目〈海鳥の低く飛びたる余寒かな)、それから14句目〈羽州連山光の春となりにけり)、22句目〈客船の通り過ぎたる海市かな)、30句目〈上流に民話の地あり桐の花)。他にもございますが、自分の住んでいるところを非常に愛情を持って詠んでいる、そういうところに共感をいたしました。

その次は、29番でございます。29番、この方の作品は、なんていうんでしょうか、とってもドキドキして、あの皆さんもお読みになったらと思うんですが、非常にドキドキして読みました。最初の1句目から見てくださいね。〈あといふこゑがふるへて春の底に〇(まる)〉、こういう詠い方、それから22句目〈一滴一罪百滴百罪雨ハ蛙ヲ百叩キ)、ちょっと長いですけども、その情景がうまく数詞を使ったり、そして最後の「百叩キ」っていう少しこう残忍な言葉でもってご自分の動作とかそういうものを表現しているのですが、それがなんていうかたぶん私たちが今まで俳句ではやってこなかったような、私っていうか個人的にとっていただいて結構なんですけど、劇画調っていうんでしょうか、そのほかにも動きが非常によく出ている、動きをうまくとらえた表現、普通の俳句のオーソドックスな詠み方ではなくて劇画チックっていうと良い意味でっていただいたらいいと思うんですが、そういうところがとてもなんか面白くドキドキしながら読みました。無季の句があるのが少し私は気になったんですけども、それを超えて、カバーする作品がたくさんあったものですから。

10分間っていうのがちょっと大変でございますが、どれを読んだらいいでしょうかねえ。ええと、15句目〈話すでもなく裸になるでもなく)、これなんか

ただ夏の裸ってということではなくて、その裸の言葉の背景にあるいろんな思いですね、想像できるところの。そういう情景が面白いと思います。

どれをご紹介したらいいかと思って、あの、ナンセンスな作品もあるんですけども、そのナンセンスなところに現代性というか、それが出ているような作品群であったかと思っています。

それから次は72番を推薦いたします。72番というのは、読んでおきますと全体的に重厚なというか重々しく、言葉遊びとしてもそういう重厚な世界を表すのに適した詠み方がされておまして、その中で特にこの作品に関して思いました句は8句目ですね、〈争乱やスープの淵に蠅とまる〉、それから好きな句は15句目〈わが枢がらんだうなる涼しさよ〉っていうのですが、そのあと、ずっともって行きまして、53句目〈世界貿易センター跡や雪間とも〉、「雪間」っていうのがこういうところに使われるかなあという、ちょっと驚きました。それに近い句を拾っていきますと、この方の戦争詠っていうんでしょうかねえ、戦争に対して今の若者がどういう風に考えているかっていうことが見えてきて、これも印象深い作品でした。

5作目は78番をいただきました。非常によくできた端正な句、スタイルのいい句ですね、それに大変好感を持ちました。少し古いところも、レトロな感じがするのも感じられなくもないんですけども、この人がしっかりと自分の周りを眺めて、そして作品化していく、それが大事なことではないかと思って注目して読んだのですが、5句目〈涅槃図のひとは大樹抱き哭ける〉、それから18句目〈しづかなる鉄路の上の落椿〉、42句目〈かうもりの口が笑ったかもしれぬ〉、57句目〈鬼の子の前で挨拶してをりぬ〉、これなんかなんとなくユーモラスなおかしの言葉を詠んでいるかと思って、非常に重々しく詠われた句もありますが、こういう軽い笑いを詠える幅広い作品ができる作者であると思って、以上5編にまず、注目いたしました。以上でございます。

西村 ありがとうございます。それでは引き続きまして城戸委員、よろしく申し上げます。

城戸 最初に、選んだ5編をまず番号を言ってしまう。3番、29番、44番、72番、85番です。

まず3番なんですが、これはあの短歌の世界の方で、90年代以降極めた工房を自在に生かした作品が目立ってまして、俳句の世界でも若い世代からそういったものが出てきたらば、またひとつ新しい風がこの俳句の世界に吹くんじゃないかと思ってんですけども、私の隣にその先駆者の坪内さんがいらっしゃいますが、そういう意味で選ばせていただきました。同時にたとえば35句目〈白玉のなめらかさで吐く（つく）嘘ひとつ〉、54句目〈幽霊にならぬようと靴を買う〉、これ、まあ、幽霊に足がないっていういわゆる言い伝えを逆手に取ったわけですけども、この自らの存在の希薄さを靴っていう物質性でもって交換しようっていうこの感覚がきわめて現代的じゃないでしょうか。一方で65句目〈体内の女叫んでいて石榴（ざくろ）〉のように、かなり何か内側から突き上げてく

るものと石榴っていう事物との出会っていうのが鮮烈な作品もあります。83句目〈セーターを脱いで心細くなっている〉、この感じなんかもとても現代的な感覚を印象付けられました。

次は29番でしたっけ。これはあの、大石委員長が語られたことに追加する形になりますけれども、とにかくまあ、この、新しい形っていうものが見えてくる。私の場合は季語があるかないかっていうのはわからないので、全てが、季語を分かっているわけじゃないんで、その辺、有季定型かどうかっていうのは意識しないまま詩として見てしまうんですけれども、たとえばそれこそ46句目〈季語が無い夜空を埋める雲だった〉なんていう作品は、季語が無いのが気になるっておっしゃった大石委員長のお話をうかがいながら大変面白く思ったんですけれども、ある硬質なイメージと同時に、たとえば64句目〈颱風曰く「困った時がチャンスです」〉、70句目〈こないだはごめんなさい春雷だったの〉、71句目〈セロリ噛むやうにさくさく忘れてやる〉っていうふうに、どこか強がった言い放ち方っていうのも魅力ではないかと思います。82句目〈無職でもよいではないか亀が鳴く〉はちょっと笑えましたね。

実は29番はあれですよ、1次選考の時に一番投票数が多かった作品だったですよ。

次、44番。これもある意味でその、俳句ってものが短さゆえに持っている高い象徴性を実現してるっていう点を買いました。ある部分は古典的な部分もあるんですけれども、3句目〈指先のきれいな自己分析や春〉っていった作品の何か鮮烈さ、あと8句目〈窓はどこだ株式市場に春の鹿〉、これは非常にシュールレアリスティックなイメージであると同時に、株式っていう、株式市場って言葉が俳句の中に入ってくる面白さがあると思います。他にも楽しい句はあるんですけれども、28句目〈戦争やはたらく蛇は笛のよう〉、あるいは53句目〈紫陽花や分母のように兄ねむる〉、55句目〈白いたまねぎ象徴になる途中〉、どこか不可解さと、観念と事物がうまく一句の中で出会ってるっていうところが大変印象に残りました。

72番、これはあの、大石委員長と重なりましたがまたもや。この作品は大石委員長の見解に付け加えるとすれば、何でしょうね、自己っていう存在と他者との関係性を17文字の中で問うっていう姿勢が強く表れているんだと思います。47句目〈白桃を剥けば剥くほど自失せる〉、55句目〈核の冬まであの人を待ってる〉、72句目〈人間はなべて病人水仙花〉、こういう自分と世界、あるいは他者と自分という関係が、この句の中にどこか、常に意識に沈められていて、今日の世界っていうものをある大きな認識の中でとらえてこの俳句が生まれてきてるんじゃないかと思わせるところが魅力です。11句目〈葛切や五衰ゆるりとはじまれる〉、これは極めて長寿を誇る仙人でさえ五つの衰えを次第に経験していつて死ぬという説話を背景にしているわけなんですけれども、その死に至る衰えと葛切っていうさわやかな食べ物との出会っていうのは大変新鮮だと思いますし、4句目〈ウランよりウンコたのしよ夏の草〉なんていうのが大変ユーモアもあるし、同時にウランという核兵器を作るための原料とウンコが出会うっていうとこ

ろも、この日常と日常を破壊するものの出会いという点で、非常に新しい俳句の魅力が湛えているんじゃないかと思います。

もうひとつが85番。これは、最初に語ったような、いわゆる口語による自由な現代感覚の表出っていう点を評価しました。1句目、3句目ともに面白いですけども、3句目〈日向ぼこ世界征服とか狙う〉とか、11句目〈白鳥が白くてどうでもよくて好き〉なんて言い回しもとても面白いと思いますし、20句目〈丸餅の丸が壊れてゆく怖さ〉なんていうのが、この現実の日々の当り前の景色の中になにか普通であるものがそうでなくなっていく、形あるものが別のものになっていくっていうふうな瞬間をとらえた作品だと思います。34句目〈この辺をつまめば辛夷咲くかしら〉、52句目〈自己決定権なき冷蔵庫で冷たい〉、なかなか楽しい作品、楽し軽やかでありながら何か事物の本質に触れていくような作品だと思います。81句目〈桃剥けば桃の秘密に手が濡れる〉なんていうのもいいと思います。

とりあえず駆け足でしたが以上5編です。

西村 ありがとうございます。それでは齋藤委員お願いします。

齋藤 五つに絞るのをまだ迷っている感じなんですけども、とりあえず僕が選んだものを番号で言いますね。2番、それから29番、58番、72番、88番。5編のうち二つ、城戸さんとダブってますよね。それでじゃあ簡単にそれぞれの選んだのに触れますね。

2番ではね、まず4句目〈逃げ水がテロも戦も孕んでいる〉、12句目の〈青空の喪に服する子らへ戦闘機〉、それから13句目〈艦砲の空を吸いこむテッポウユリ〉、それから18句目〈鳴き通す沖縄戦の空蟬〉だとか、24句目〈手のひらの宇宙を開く赤ん坊〉、こういう作品ありますね。それから56句目〈闇を剥ぐキャベツの芯は核の渦〉とか、96句目〈ランドセル揺られて並ぶ原潜〉、97句目〈戦争のもう戻れない蟬の穴〉。これはなんというか作品としてですね、一句、完全にこれは秀句だとか傑作だというふうに必ずしも言えないわけですけども、ここにはちょっとびっくりするほど今までの俳句の、少なくとも今までの芝不器男賞に応募されたものにはないものがずいぶんあるよね。テロ、戦、沖縄戦、遺骨、死者、それからニライカナイ、イラクの樞、基地だとか原潜、こういうなのずいぶん出てきますよね。で、勝手にこれなんとなく今、沖縄問題がずいぶん、普天間とか話題になっているので僕も沖縄のことが頭にあったせいか、なんかこれを詠んだ人は沖縄の人かなと思って、沖縄から応募あるのかなと今考えてるんですよ。それで僕は俳句の中にとにかく今言ったような、ある、なんていうかな戦争とかそういうものをね、詠むっていうのは本当に難しいんですよ。でもまあ、そういうものをやっぱり詠んでほしいって気がしますよね。本当にこれは難しいと思うんですよ、テロだとかその言葉だけでね。で、やっぱりそれは何かって言うと、あのユダヤ人の哲学者のアドルノって人が、有名な言葉ありますよね、アウシュビッツを知った後はね、詩を書くことは野蛮であるというような発言をしました。これはずいぶん話題になって、俳句の俳人にはこれに対して

唯一応答したのが矢島渚男さんというまあ人間探求派、加藤楸邨さんのお弟子さんだけあって、彼はその言葉をこういうふうに敷衍したんですね。つまり、南京虐殺があった後は俳句を書くことは野蛮である。つまり何を言いたいかと言うと、もうアウシュビッツとか南京虐殺とか人類が犯したそういう罪というのを知ってしまった以上は、我々はもうそれをなかつたこととして俳句とか詩なんか考えられない、能天気には作ってられないという、いつもそういうことを背負ってというようなことを言いますね、だから僕なんかも俳句の中にもたとえ自分がそういう歴史を知らなくても、少なくとも我々の祖父とか父親とかがみんな戦争というものを経過したんだったらその戦争というものを自分の表現に、その歴史性つてものをね、やっぱり僕は入れたいというふうに考えているわけ。で、そうするとやっぱり本人ずいぶん検討してんですね、〈逃げ水がテロも戦も孕んでいる〉っていう、「逃げ水」なんていう普通の季語の中に、いちばん何でもなしというものにでも「テロも戦も孕んでいる」という、これはもうそれぞれの読んだ人の想像力でしょけれども、「逃げ水」っていうものを見てですね、それが泥水か何か知らないけども、どこかやっぱり深層のイメージで、テロとか、アフガンで行われているそういうものが連想されるんでね、深層意識のうちで。それで、ずーっとこう見てくると、〈ランドセル揺られて並ぶ原潜〉というのが出てくるよね、96句目に。こういうのだから、小さな子どもたちがランドセルでみんな原潜を鑑賞しているのか、子どもたちにとってはそれどういうふうに見えるかわからないけども、原潜に、要するになんていうかな、ランドセルの子供たちに原潜が横たわっているという、こういう風景を描き出すわけですよ、この作者はね。で、こういう人だからこそ僕は、たとえば24句目の〈手のひらの宇宙を開く赤ん坊〉という、沖縄はなんかそういうところで、基地で育った人というのはね、こういう宇宙を詠むにしても赤ん坊が手を開いただけでもそこに宇宙がのっかっているとかな、こういう発想はやっぱりね、戦後の沖縄の状況なんかを考えたらね、こういう俳句が生まれるんだと思うんですよ。で、これはどうしてもやっぱり気になって、必ずしも今言ったように作品としてみんなを納得させるものではないかもしれないけど、とにかく生々しい現実というものを詠もうとする姿勢は買いたいと思います。

次、29番。29番ではですね、9句目〈幻聴も夢も現実の光よ〉とかね、10句目〈ゆつくりと陽炎になる老婆かな〉、37句目〈虫の闇宇宙に鼓膜たゞ二つ〉、84句目〈万緑に解体されし家屋かな〉、まあこういうのはみんな通りますよね。10句目の〈ゆつくりと陽炎になる老婆かな〉ってのは僕は好きな作品ですね。それからこの人の宇宙観っていうのも、37句目〈虫の闇宇宙に鼓膜たゞ二つ〉っていうのも良く分かるような分からないような気がするけども、この宇宙っていうことを視野に入れて、そこでたった一人、なんていうかな、自分の、個の、生きてるっていうかな、そういう孤独感みたいなものが詠まれてますよね。で、29番を選んだんです。

次が58番。58番は、わりかしこの人は俳句かなりやってるんじゃないかな。その中で面白いのは32句目〈日輪をひらりとかはす金魚かな〉、それから3句目の〈黒潮のきりりとみゆる椿餅〉、それから61句目〈金魚の目にうつるもの

みな難破船)、金魚なんかいろいろ詠むんだけど金魚の水から難破船を想像する、そんな僕は無理じゃないと思うんですよね、確か三橋敏雄に〈遙かなる海を目指す金魚玉〉っていうのがあったけども、目の前の金魚玉っていうわずかな水の水の金魚玉を見ながらその水がいずれは大海に注がれるであろうという、「遙かなる海を目指して」というような、ものすごく連想するというのに比べてもこの「難破船」っていうのはいいんじゃないかと思いますね。あの、この人は金魚をずいぶん詠ってますけどなかなかいいアイデアだったよね、先ほどの〈日輪をひらりとかはす金魚かな〉もそうだし。それから68句目〈芒原出て猫の脰すこし伸び〉っていうのも、芒原みたいな未開に入ったら猫だってやっぱり変わるんですよね、出てくるときには。それから90句目〈梟のとぶたびずれる世界地図〉、有名なヘーゲルかなんかに「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」ってなんかありますけども、梟というのは西欧では賢者、賢者っていうかそういう哲学者っていうか思索者っていうイメージがあるわけですよ、そういうまさしく黄昏に飛び立つ梟に世界地図は刻々変わってますよね。21世紀にはいっても戦争は絶えたことないし、新しい国家が生まれたり、新しい国家がなくなったりするという。ええと100句目の〈方舟のやうな気がして北窓開く〉っていうのも僕は好きですね。つまり自分の家を、自分のいるところを方舟というふうに考えているわけ、方舟っていうのは結局最後にノアの箱舟ですべて地上が崩壊するっていうか、その時の自分の今住んでいるところを方舟というように見ていると。で、こういうなのを感心した作品です。

それから72番かな。72番もさっきの戦争じゃないけどずいぶんこの人も頑張ってますよね。ちょっと面白いのは56句目の〈数へ日の日出づる処こげくさし〉、それから59句目〈戦場に窮屈すぎし〉、ま、窮屈すぎるってことですよね、〈枯野かな〉、同じように60句目〈アフガンの起伏に富める蒲団かな〉、これなんかやっぱり面白い、〈アフガンの起伏に富める蒲団かな〉っていうのはね。うん、自分でつい頷いてたんじゃしょうがないんだけども。こういう俳句もあるわけ、71句目〈毬つけば人を殺めし心地かな〉っての。手毬をつくっていうのは僕もずいぶん詠ったんだけども、なかなかこういう俳句っていうのは、「人を殺めし心地」っていうのは詠んだ人はいないよね。何かなというこれは理屈っぽいけども、手毬っていうのは確かに子守唄とか、手毬っていうのはすごくわらべ歌といいながら残酷性というものを秘めてるよね。ああいうものはやっぱり貧しい土地の、なんていうか子守娘が歌っているということから、だいたい西条八十でも誰でも子守唄っていうのは残酷ですごく貧困とかそういうところが背景にあるんでしょね、時代的背景、間引きした子どもだとかいろいろあるから。だからこれ〈毬つけば人を殺めし心地かな〉ってなったんでしょけども。日本の民族性、民族の深性を背負ってるというふうにも感じますね。72句目〈人間はなべて病人水仙花〉、これはまあ、みんな人間っていうものは病んでるもんだと、人間は病むっていうひとつの哲学思想なんだけども、単なる病気じゃなくてね、つまり人間っていうものは生まれた時から傷あるものであり、病んでるもんだっていう考え方が、僕なんかもどこかにあるもんで、こういうのには惹かれました。それから87句目の〈罅や地表に未だ大気ある〉、これはあるいはひよっとすれ

ば終末観を詠んでいるのかもしれない。すべて地表に人がいっさいなくなっただけでも、囀っているのはいたのかなあ。それでそのことでまだ大気が残ってるって感じで、おそらく末世というか終世、この地上が、いっさい死が訪れた時の光景をこんなふうに詠んでいるのかなと思ったりするんですけどもね。その他には100句目の〈戦争と戦争の間の朧かな〉とか、92句目〈ひとの敵かならずやひと昔着〉、本当にひとの敵っているのはひとなんですよね、もう昔から、人間生まれた時から。93句目〈十字架の釘錆びてをり花の昼〉っていうのも、今まあ、それこそイラクっていうのは、結局これ宗教戦争だからね、で、そういうふうに引っ張るのはちょっとおかしいけども、やっぱりこういうふうに戦場ってのはアフガンだとかこんなばっかり詠まれてるとついそんなふうなものまであれするけども、それはまあ別にどうでも良いことですよね。

あと、最後に88番を選びましたね。これは、何がいいかな。これはわりかしあの、たとえば21句目の〈潮鳴りや夕焼の髪を解きをれば〉とか、24句目の〈山彦のつひに戻らず夏の果〉っていう、だいたい普通の感じで詠んでますよ、この人はね。でもやっぱりその感覚の新しいところは、88句目の〈空色の鳥の卵を拾ふ野よ〉とか、87句目の〈春服の夫や森の匂ひして〉、「春服」や「森の匂ひして」なんていうのは良い感覚ですよ。それから81句目の〈採血の痕あをざめてゐる櫻〉とか。

というわけで、とりあえずこの五つに絞りました。

西村 ありがとうございます。皆さん見てドキドキ、とにかく29番と72番は全先生が今まで推してる状況なんですね。それでは対馬先生お願いします。

対馬 今回ほど絞るのに迷った選はなかったです。時代もそうですけれども、俳句もどんどん多様化して行って、その多様化の中でどういう選をするのかっていうことで、すごく迷いました。

私が選んだのは、まず13番、ひとつひとつ言っていきますね。この人の句は・・・

西村 まず、全部言っていただけますか。

対馬 あ、言いますか。13番、それから18番、49番、それから、81番。あと50番の五つですね。

まず13番の句はですね、ちょっと俳句的に言うと近代の形に近いと言いますか、そこで叙情性もあって、古いとまではちょっと言い過ぎなんですけれども、古格がある詩性という、ポエムですね、それを求めている俳句の一つだと思って選びました。その中ではですね、13句目〈新しき鳥容れてまた囀れる〉、それから24句目〈遠く畑返す人月色に風ぎ〉など透明感があってきれいです。それから、54句目〈血が出たと網戸の外で子がうるさい〉は、一転して愉快的発想です。それから70句目〈道譲るとき刈り草を少し落とす〉、また92句目〈秋の灯の他に数えるものもなく〉とかですね。結構〇したのは多かったです。抒

情性のある言葉がこの作者は選んでいるなっているところをまず惹かれたところと、あと、さりげない景ながら、一つ一つ目線がはっきりしている。かなり作りこまれている人、長い間作っているのかなっている感じを受けました。

そして、18番、これは大石先生と重なったんですけれども、この予選の中で、全体を通してそうなんですけれども、こういった句もまたひとつの特徴だなどと思って選びました。この芝不器男賞はわりと口語調で、自己、自分ていうものを前面に出した俳句が多い中で、景に徹して押さえて詠んでいるところがひとつの特徴だなどと思います。14句目、これは大石さんと一緒ですけれども、〈羽州連山光の春となりけり〉、堂々としてますね。25句目〈風船の深き軒端にとどまれり〉、風船というと明るく現代的なものを思い浮かべるのですが、言い過ぎない、単に深い軒端に風船がある、ただそれだけのことを言っているのですけれども、ひとつの世界をかたち作っているところに好感が持てます。それから56句目〈山鉾の先あらはる坂の道〉は、だんだんと山鉾の先が見えてきたという景がうまく詠めていると思います。83句目〈飛び石のひとつにかかる萩の花〉、萩の花が散るさまを、飛び石のひとつにかかっている、落ちているっていうところを、小さい景ながらうまくとらえていると思います。奇を衒わない良さというものがある作者、それがひとつの俳句の道すじだと思って採りました。

あと49番ですね。49番は若く明るい作風だなどと思います。5句目〈手加減の出来ぬ双六上がりけり〉、小さい子どもたちと一緒に、大人同士か、ついつい「上がり」を目指して本気になる。その双六ってものの面白さをよくつかんでいると思います。それから19句目〈春コート夢ばかり見て海を見て〉、これも何か屈託がないという感じはするんですけれども、なんて言いますか、戦争を詠んだり現代社会の暗部のようなものを詠むのもひとつの生き方であると同時に、普通に生きている、普通の精神の明るさっていうことを詠むのもまた難しいことだと思うので、そういう句もいいと思います。36句目〈かつぼれの膝の高きに夏兆す〉は見事な写生句。それから47句目〈増上寺裏で十年氷売〉、いかにも実景ですが、「増上寺裏」がいいですね。61句目〈みづうみの色を容れたる桔梗かな〉、91句目〈新海苔の置かれ相談事など〉、俳句の技法もかなり会得している方です。言葉中心主義の作者もいれば景中心主義の作者もいて、この作者も、俳句とは平明にして余韻ありっていう俳句の一つのタイプを持っている作者だと思います。とにかくこの屈託のない開放性のある表現というのが良いと思います。

あと50番ですね。すごいなと思う句とちょっと選べないなという句の差があったのですけれども。まず14句目〈蛇うねり泳ぐや川を冷やしめむ〉、いかにもなんか蛇の質感と言いますか、その蛇の質感が川の水の冷たさに移っていく、その不気味さが現代のうそ寒さというようなものが感じられて選びました。それから61句目〈秋ながらサンダルなるよ浜辺に藻〉、この、ま、サンダルって夏の季語ですけれども、そこで秋を持ってきてそのあとに「浜辺に藻」ってちゃんと落ち着かせるって面白いと思いました。次の62句目〈いちやうもみぢ踏みても路のかたさなる〉、「いちやうもみぢ」を踏んだときの平たい感覚が確かに言えていると思います。あとは69句目〈落葉して猫太りしか抱いてみむ〉、落葉

と猫太るっていうのは一見何も関係ないんですけど、秋の倦怠感ていいますか、晩秋の寂しさと、太った猫を抱いている、何かに頼りたいような、ずっしりとした何かに心を求めているというような句です。

そして最後81番ですね。81番も面白い句がいっぱいありました。3句目〈鳥帰る東京液化そして気化〉、これは東京の、都会のうつろさが象徴されていると思います。8句目〈毛を刈られ羊は多面体となる〉、多面体っていう言葉がうまく生かされてて、ちょっとなんていうか現代っぽい、毛を刈る羊っていうことを現代絵画のように捉えたなあと思います。11句目〈絵の中にのみふらここは静止する〉、ブランコは現実でも止まっている時間はあるのですが、絵の中にだけ止まっているという断定、シュール感っていうか、そうなのかと思わせる意表をついたところがあると思います。それから48句目〈水は水に欲情したる涼しさよ〉、この人は、どちらかという、気持ちを前面に出してくる作者かなという気がしますけど、水は水に欲情してそれが涼しさであるという、こういう感覚は好きですね。また61句目〈コスモスは咲いてみないと兵士のやう〉、コスモスが花は咲いていないと兵士のようにだっていう、その例え方が何とも言えず独自性があるなあと思いました。以上です。

西村 はい、ありがとうございます。それでは、最後に坪内先生お願いします。

坪内 ええと、今までまだ迷ってまして、10編くらいはなんかずっと選べる。それを五つに絞るのがとても難しい。

西村 先生、10編いつていただいても結構ですよ。（笑）

坪内 いや、それはいくらなんでも…
まず、先に番号言います。まず29番。

西村 29、29番、おお。

坪内 29番、次が58番、それから71番、それから84番、それから85番です。それで五つ。

最初の29番は、これはもうすでに4人が重なっていますが、確か1次選考会からすでに重なっていたんですね。この作品は皆さんもういろいろおっしゃいましたけども、あの、いいなと思うのと、え、これでもいいのというのとの落差がとても激しいんですけども、だけどその落差があるエネルギーというか、未知のものを感じさせる感じがややするんですね。だから、こういう賞ってやや荒っぽくて、だけど未来があると感じさせてくれる作品っていうのが、選ぶ側としてはとても面白いので、そのあたり、何か出てくるかなあという気がします。僕は大阪にいますから、何か大阪弁の俳句みたいなものがあって、たとえば42句目の〈結局なんもでけへんかつたぽんかん抱く〉とかね、それからこれは大阪の人とは限らないけど何だか大阪のおばさんみたいな80句目〈乳房ややさわられなが

ら豆餅食う)なんてけったいなことしはるなあと思って(会場、笑)、こういうおかしさみたいなものが、ユーモアみたいなものがあって、若い世代ですから比較的ユーモアみたいなものが乏しいと思うんですね、全体としては。だけどこの人の物の見方の中にはそういうものがあるっていうのも僕はひとつの魅力。だからついていけないのもあることはあるんですよ、たとえば92句目あたりの〈この恋は成就しません〉って言って急に〈色変えぬ松〉とかやって。それから93句目〈手をつなぐ人がゐない夜の銀杏(いちょう)〉、勝手にしなはれっていう(会場、笑)。94句目〈あと何度死ねばいいのか去年今年〉なんてのはわかりきった認識だしね、ついていけないのもあるんですけども、だけどもある魅力を感じさせるなあというふうに思っています。

それから、その次は58番でしたね。58番は齋藤さんと重なっていますね。僕もね、齋藤さんがもうおっしゃられたんであまり言うことくないんですが、金魚がずーっと一貫してあってね、ベースに金魚がいる。その金魚がとても面白いんですね。僕が面白いなあと思う金魚は、ええと31句目の〈金魚らは鼻のあたりでもの思ふ〉、えー、金魚って鼻のあたりで考えてんのかと思うと、金魚飼ってみようという気になります。それから37句目〈金魚美し糞がなかなか切れずとも〉って、この人にもある種のユーモアのセンスが少しあるんですよ。それで金魚を根っこに持って、作り続けたっていうところがなんか面白いですよ。で、その他に僕が好きなのは14句目の〈草餅のために机をきれいにす〉とか、つまり草餅のために机の上を提供するとかいうふうな発想がいかにもこれは俳句的な発想だというふうに思います。それから20句目〈泣く人がいそぎんちやくに見えてならぬ〉なんてのもとても面白い、おかしい俳句です。最後の100句目の〈方舟のやうな気がして北窓開く〉っていうのも存在の不安感みたいなものをこんなふうに表現してて、これは若い人らしい素敵な俳句かなあと思いました。でもわからないのもあります。たとえば88句目の〈林檎・きりんごと時を遡る〉、これはきりんごってのは何かわからないけども、けどもそういうわからないものがあるってのは俳句でとても大事で、なんか1冊の句集を詠んだ時に2割ぐらいわかったらだいたいいいんですよ。で、全然わからない、何のために作っているんだろうってのが2~3割はあるんです。だから、全部わかる俳句作っている人はだめなんですよ。むしろあまり読者にわからないものをどこか持っているということがきっと大事なんだというふうに僕はこのごろ思います。

その次は71番でした。71番は、この人の文体は僕の俳句にとっても近い文体です。だからなんとなく仲間を選んでもるような感じがしないでもないんですけども、たとえば19句目〈鬼ごっこ夏蜜柑までいこうかな〉、34句目〈今日だけはキスしていいよ星月夜〉、こういうキスの俳句がいっぱいありますね。その能天気さというか明るさが現代風で気持ちがいいかなあというふうに僕は思います。79句目〈キスと書きたい十一問目大試験〉、ただこういうのは「キスと書きたい」といって「大試験」が出てくるってのは、やや奇妙な、古い、あまりにも古い言葉と新しさが結びついているわけで、俳句の難しいところかもしれないと思うけど、けどもとても素直な、なんていうんだろう、あまり背伸びしない若者の感情みたいなものを僕は感じ取って、好ましいと思ったんです。

では次は84番。84番は、これも僕好みでして、たとえば31句目〈夏空のような大皿買いにけり〉、俳句ってとてもシンプルな表現としてやっぱり一番持ち味を発揮すると思いますから、こういう大きなお皿を夏空のようなという、とても気持ちが良くなりますね、それだけでいいんだというふうな。33句目〈枇杷熟れてまだあたたかき山羊の乳〉なんていうのもなんか、山羊の乳を飲みたくなるような感じがします。それから54句目の〈冬瓜をながながとよこたえて留守〉というのもとても素敵な留守だなあと。それから94句目〈大統領就任の日のおでんかな〉、こういうことを詠うのは俳句しかたぶんないんですね。「大統領就任の日のおでん」、「大統領就任」と「おでん」を並べる楽しみみたいなのがやっぱり俳句のとても魅力的な楽しみだと思います。

それから次は最後、85番ですが、85番は誰かと重なりました。城戸さんかな。僕もね、城戸さんが挙げた句が好きなんです、実は。34句目の〈この辺をつまめば辛夷咲くかしら〉、なんか、つままれてみたい感じしますよね。それから35句目〈ちはやぶる神に絡まるいそぎんちゃく〉というのも、こういうのは「ちはやぶる」っていう枕詞を意識的に使って、しかもそれと「いそぎんちゃく」を結びつけてみるという、こういうなんかやや知的な働きというのが素敵だと思います。それから84句目の〈赤子やら冬瓜やらを抱き上げる〉、これも「赤子」と「冬瓜」を結びつけていて、俳句は昔から取り合わせ、取り合わせって言われるんですけども、たぶんすべての日本の芸術の中で取り合わせが最も見事に決まるのが俳句というシンプルな形式だと思うんですね。和歌なんかだともう取り合わせは長すぎて無理なんですね。そういう意味では取り合わせを巧みに使っている人っていうのは何となく俳句に選ばれる人なんかかなという気がします。11句目の〈白鳥が白くてどうでもよくて好き〉というのは城戸さんも好きやおっしゃいましたが、僕もこの人の句、好きでした。とても気持ちのいい句でした。とりあえず、以上の5編です。

西村

ありがとうございました。この第1プロセスは、2時15分までやる予定でございました。それぞれの先生方から多様な作品の推薦をいただきました。あと5分ございます。事務局あるいは我々このプロセスを管理する側としては、できるだけ多くの予選通過者の方々に対するコメントを頂ければいいかと思えます。もし、まあ今回5編には言わなかったけども、これについては何か言っておいてあげたいなあという作品がございましたら、いかがでございましょうか。坪内先生も10編、悩んだうえで5編に絞ったとおっしゃってましたが、あと5分の間でどなたかございますか。よろしゅうございますでしょうか。あの、大石委員長どうでございませうか。誰か一言これについて言っておいてあげたいというのはございませうか。城戸先生よろしゅうございますか。もういいですか、いいですか、いいですか。それでは、この第1プロセス、予選通過をしておられながら今回ちょっとコメントから漏れた方がおられるかもしれませんが、必ず、先生方からこの会場でコメントをいただく機会を作りたいと思えます。

それでは10分間の休憩をいたしまして、いよいよ最終討議に、2時25分から入りたいと思えます。そのプロセスにおきましては、今、先生方が挙げられた

5編の中から2編を先生方に選んでいただいて、そしてそれを芝不器男俳句新人賞、それから各先生方の賞へと結びつくプロセスに入りたいと思います。それではただいまより休憩に入りたいと思います。

(休憩)

西村 それでは、最終討議に入りたいと思います。各委員より新人賞等候補を2作品、これから挙げていただきます。大石委員長からの申し入れもございまして、先ほど申しましたように、もし本当に混乱状態になった場合には最終的に大石委員長の意見を採用するというルールになっておりますので、最後に大石委員長のご推薦をいただくという形で、順番といたしましては城戸委員、齋藤委員、対馬委員、坪内委員、そのあと最後に大石委員長のご推薦の発表をいただきたいと思います。それでは、トップバッター、城戸委員をお願いします。

城戸 ええと2作品ですよ、とりあえず72番と、85番にします。

西村 はい、それでは72番と85番でございますね。齋藤委員お願いいたします。

齋藤 僕はね、58番と72番。

西村 72番。ほお、だいぶ第1プロセスと変わってまいりましたね。では対馬委員。

対馬 私は、じゃあ49番と81番にします。

西村 それでは、坪内委員お願いいたします。

坪内 僕は、29番と58番。

西村 それでは、大石委員長。

大石 はい、私は29番と、それから72番をいただきたいと思います。

西村 だいぶ第1プロセスとこの絞り込みの結果が、まあイメージが変わってきたと思います。それは5編に選ばれるものと、最後の2編に選ばれるものとの距離、というものがこの先生方のプロセスの中に反映されているということになるかと思えます。

それでは、このそれぞれの2編を選ばれました、それから推薦理由、それは他の委員を説得するというのも頭におきながら、それぞれの選考趣旨の説明をお願いいたします。まず、城戸委員よろしくをお願いします。

城戸

ええと29番も大変惹かれて、大きな潜在力や可能性を感じたんですけれども、これはおそらくどなたかが推して下さるだろうという前提のもとに。

72番なんですけれども、まずやはり戦争詠ってというのが非常になんでしょう、生々しい形ではない中で、試みとして詠まれているということ、それからやはり全体にユーモアもあるけれども完成度も高いし、存在自体への問いかけもあるっていう部分、それこそこれは先ほど齋藤委員がおっしゃったんですたっけ、100句目の〈戦争と戦争の間の朧かな〉、このピースっていう平和って言葉の語源、ラテン語のボックスですけども、ボックスっていうのは、何かを制圧することって意味なんです。ですから、ひとつの帝国が他を征服した時に初めて平和が訪れるっていう非常にシニカルな意味を背景に秘めている。まさにそのようなこの時代が抱え込んでいる先行きの見えなさを、たとえばこの一句は見事に表装しているんじゃないか。で、それ以外でも例えば81句目〈ラグビーのむなしくなれば政（まつりごと）〉ですね。あるいは89句目〈春たけなはにはとりの首刎ねられぬ〉なんていうのも戦争とはまるで違うところで、感情や叙景やさまざまな要素が見事に表現されているんじゃないかと思います。そう意味では、作品の根本的な主題が一貫してるってこと、さらにモチーフが多様であるということ、表現の方法にやはり斬新さを感じられるっていう3点でもって72番を推します。

それから85番ですね、85番はおばさんぽいっておっしゃったのこれでしたっけ。関西の。違いましたっけ。違いますね。やはり清新な感覚が極めて鮮やかに立ち上がってきてる。1句目〈山茶花を流す蛇口がありません〉、まあ非常にシンプルな作品なんですけれども、何かあつけらかんとした、なんででしょう、予め正しい骨格でもって余韻に何かをゆだねるという方法ではなくて、たとえば66句目〈噴水のナルシシズムが許せない〉とか、67句目〈刑法第三十九条かたつむりに殻〉とか、ある意味ドライな感覚でもって現代性を切り取ってくるって部分、同時に65句目〈3kmを泳いで性愛の疲れ〉のように、身体性との出会いっていうのも演じられている。これは84句目〈赤子やら冬瓜やらを抱き上げる〉などにも通底しているかと思います。一方で99句目〈月光を君と白虎でいることよ〉のようにどこか謎めいた部分もあって、全体にやはりこう、出来事と自己の出会い方がとても新しいっていうふうに思いました。以上です。

西村

ありがとうございました。それでは齋藤委員お願いします。

齋藤

結局ですね、何回ぐらい詠んだのかな、結局4回ぐらい詠んだのかな、僕は全部で。それぞれの作品を。それでも一番最初にやっぱり感じた印象で、僕は72番と58番かな、選んだのは。そうですね、58番、72番。でね、不思議にその、共鳴句っていうのかな、それも全く同じなんですよね。えー、なんて言う、これもあの、数がだいたい同じなんです。僕は。

それでですね、なんだっけ。58番で先ほど触れなくて、しかし良い作品、11句目の〈体内に丹のいろありて囀れり〉、それから17句目〈沈丁を猫のかほして嗅ぎにけり〉、ま、こういうのは伝統俳句の人はみんな採るでしょうね。そ

れから坪内さん誉めてたけど20句目〈泣く人がいそぎんちやくに見えてならぬ〉、それから23句目〈明易のわれもむかしは木から木へ〉、こういうのは好きですね、やっぱりね。何ていうか今の新しい生物学者に言わせると、体内に入った時、子どもっていうのは体内から出るまでに10カ月の間に30億年の夢を見るそうですね。だから脊椎動物が海から陸に上がった時の記憶まで持っているらしいですね。こういうことも考えさせられますよね。それで、さっき坪内さんが触れなかった金魚の作品で、26句目〈金魚すゝむ無数の窓を開けながら〉、それから30句目〈水替えて金魚が水をまぶしがる〉っていう、こういうのもね、さっき一連の金魚、それから49句目〈天井に漣ひとつ金魚玉〉っていうのがありますよね。それから他に何かあれだったなあ、ええと、この作品では69句目〈複葉機飛び立ちさうな花野かな〉、全くそう思いますね、あの、「花野」ってのはいろいろ僕らも詠むけども、「複葉機飛び立ちさうな」っていうのは僕も発想はあまりなかった。70句目〈星雲の一部に皺や衣被〉っていうのかな、これなんかもすごいなあ。それから60句目〈ぱびるすに早の記述ありにけり〉ってこういうのがあるわけよね。こんなわけでこの人はかなり面白そうな俳句がずいぶんありましたね。ええと、これが58番。

それで72番。2句目、さっき触れなかった〈ぼうたんの天上天下すべてやみ〉、15句目〈わが枢がらんだうなる涼しさよ〉、23句目〈左手のかつてにひらく原爆忌〉、それから43句目〈光昏の薄浄土にあそばむや〉、それからどれかなあ、62句目〈災厄の蓋あけてある今年かな〉、この人はさっき言ったとおりずいぶん戦争とかそういうのを詠んでるわけだけれども、この「災厄の蓋」ってのはもちろん例のパンドラの箱っていうのかな、それをあけていろんなもの、絶望とかいろいろあって、最後に残ったのが希望っていう、何かありましたよね、パンドラの箱っていう、でも、とにかくこの数年間、21世紀になってもまだとにかく世界から戦争っちゅうのがなくならないんだからね、てなことを考えますよね。で、ここ一連に「雪女郎」っていうのがあって、「雪女郎」は今年の蛇笏賞か何かを取った真鍋呉夫さんさんなんかもずいぶん「雪女郎」を、雪女を詠んで彼は読売文学賞をもらったわけだけど、今年、蛇笏賞をとりましたよね。あの人の雪女ってのはすごいんだけど、この人もなかなかのもんであって、あれだけ何十年間、真鍋さんが詠んでた「雪女郎」、雪女を、全然こっちの方が、あれだね、また違うところで詠んでる、66句目〈わが死には汝がつきそへ雪女郎〉、こんなふうに詠んだ人いないからね、自分の死にはお前が付き添え雪女郎、それから今のよりもっとすごい67句目〈脳内を曝して笑ふ雪女郎〉、今はもう脳科学者のブームだけれども〈脳内を曝して笑ふ雪女郎〉ってのはちょっとね、やっぱり。70句目〈肉よりも霊の重たし冬籠〉っていうのもあれじゃないかな、何となくこの人の俳句自身を何か象徴しているようですね。霊ってのは別に靈魂の霊じゃなくてもいいわけであって、要するに精神性ってものを大事にするってことなんでしょうね。それから83句目〈心房はさびしきところ霾れる〉、これも良いし、それから90句目〈銃声と思ふまで亀鳴きにけり〉、こういうんだって、これなんか歳時記に挑戦しているよね。亀鳴くなんて言葉はもう死語になっていて誰も詠む人いないわけだけれども、亀がだいたい鳴き声、どんな声かよくわかん

ないって言われてる時に、この人は「銃声と思ふまで」っていうふうにまさしくあれだよね、歳時記に挑戦し、まあこういうのを逆にすごく政治的に解釈すれば反戦俳句といってもいいくらいですよ。それから同じように歳時記を、というか世の中の歳時記に一生懸命頼っている人を揶揄しているのが94句目〈花の下人々儀式めきにけり〉っていうのそうですよね。花ってのは必ずみんなあれでしょ、こういうふうに詠む、こういうふうに詠む、桜の花に関して詠むことは、桜の花の定義だって随分変わったわけだよね。原始、農耕社会にあった時の桜観ていうのと貴族社会、王朝時代に詠んだ桜、それから中世、仏教思想が入ってからの無常観が詠む桜、それから戦争のぱっと散るようになっていう武士道なんか盛んになった、どんどんどんどん花っていうのは変わってきてるわけだけれども、要するに〈花の下人々儀式めきにけり〉で、その都度変わっていくわけですよ、季語に込める意味も、いまでは桜もただ簡単にあつけらかんと太平楽を頼んで皆、花を見て笑い転げるといふうちに。で、こういう一句にも俳句を考えるっていうか、そういうことがあって、やっぱりこの作品と、さっきの58番っていうのは残りましたね、僕の場合は。

西村 はい、それじゃあ対馬委員。

対馬 私は最後の2編ということで、なるべく他の委員さんと重ならないような意図をもって49番と81番という二つを選びました。

まず49番ですけども、さっき言った他に、たとえば8句目〈水仙や前だけを見て疑はず〉、13句目〈ものの芽とものの芽結ぶひかりかな〉、どちらもですね、ものをよく見ている、ものの神髄を見て詠もうとする態度、それが前面に出て、しかも言葉に頼っていないというところが好感持てます。20句目〈春雨てふ銀の鎖をくぐりけり〉って、とてもきれいですよね。ロマンチックな句ですし、春雨を形容していて、春雨に音があるようなポエムがあると思います。それからこの作者はしっかりしたかたちだけでなく、作り方の冒険心もある。たとえば63句目〈広野続けば吾亦紅吾亦紅〉、こう面白い句も中に入れておいて、言葉に頼らないっていうところで、テーマ性を追求するだけでなく、言葉の意外性を積み上げていくというところでもなく、自分の感情を俳句にするにはどうしたらいいかってところを、真摯に素直に追及しているところが伝わってくる作品だと思います。あとですね、75句目〈虫売になりたき頃の瞳かな〉、これなんかすごい句だと思うんですよ。ここで「瞳かな」を持ってくるというこの技は、さりげないですけども、少年少女の頃の澄んだ気持ちが象徴されている瞳ですね。それから93句目〈一枚の障子すとんと外れけり〉、これも面白いと思います。障子の外れ方っていうのがうまく即物的にきちんと詠んでいると思います。なんかこの49番はですね、真の意味で俳句の多様さというか表現の多様さっていうのを試みている、ひとつのところに囚われないでいろんなものを取り組んで詠もうとしているところが感じられました。あと46句目〈遠くまで金魚の水を買ひに行く〉、これなんかも私は好きだったですね。何を買ひに行くかという金魚の水である。何番かで金魚の句がたくさんありましたけども、ああ

いう表現も面白いですし、こういうなんかこう、抒情句といえますか、そこにも良い句がいっぱい持っている作者だと思いました。

81番ですね。こっちはまた49番とはちょっと毛色が違くと。この芝不器男賞ということを考えるとですね、やはり破調と口語調とか季語がなかったりするっていうのも一つの選び方ですけども、やはり49番においては有季定型を守っているというところでひとつの枠として選んだのですが、81番は有季定型ではありませんけれども、また違うタイプの面白みがあるなあと思いました。たとえばですね、さっき選ばなかったので、21句目〈星条旗の青い部分を昼寝かな〉、たとえばこれを戦争の、反戦の句だと言えばそうともとれますし、いろんな解釈の仕方ができる句ではないでしょうか。それから23句目〈五月闇とは畳まれし帆のやうに〉、「帆のやうに」っていう、闇が畳まれているってところがいいですね、私なんか好きなタイプです。それからですね、力があるなと思ったのは76句目〈歌積んで山河を成せと偽勅かな〉、なかなか古格のある堂々とした句ですね。この作者も〈コスモスは咲いてゐないと兵士のやう〉と言いながら、「歌積んで山河を成せと」っていうなんかいろんな形をもった作者だなと思って、その手腕といえますか、技量に惹かれました。100句目の〈月と日にわれてあはぬよ枯木山〉、これもなんか堂々としてますよね。大きな景を詠んで、しかも何か寂しさというか、時間の経過をうまく一句に表していると思います。

で、49番と81番です。よろしくお願いします。

西村 それでは坪内先生お願いします。

坪内 はい。ええと29番の人がもしここにおられたら、ややがっかりしてるかもしれないけど。皆さんが29番からどっかへ移って行かれてしまいましたが、僕はやっぱり29番を推します。29番の人の作品は、これがいいっていうのは少ないというのはたぶんありますね、僕はいいなと思うのは18句目の〈落ちてこそ雷死んでこそ人間〉、42句目〈結局なんもでけへんかったぽんかん抱く〉、それから77句目〈深入りはするなと言われても夏だ〉、こういうのはおもしろいかな、だから僕はいいなと思うのは三つぐらいしかない。だけど、いろいろなことを試みようとしてて、そこに何かを感じるんですね。ただその試みが、俳句がうまくわかって試みているというよりも、なんかむちゃくちゃしてはるんですよ。まさに73句目〈歳時記は要らない目も手も無しで書け〉といったそのエネルギーでやってるんですけど。だけどこれはとても大事なことなので、僕はこの人の姿勢を評価したいと思うので、最後まで推そうというふうに思っているのです。実はもう一つお話を聞いてもらっているとわかると思いますけど、戦争を詠んだ俳句がかなり支持されてますけど、僕はそっちはどちらかという推してません。頭で理解できるのは俳句ではあまりおもしろくないと思ってるからですね。

僕は次に推すのは58番です。58番の、ええと、これは先ほど言いました金魚の俳句です。こっちは人には、愛誦する俳句がたくさんあるんです。僕にとっては。もう一回言いますと14句目〈草餅のために机をきれいにす〉とか20句目〈泣く人がいそぎんちやくに見えてならぬ〉、それから齋藤さんも言われた2

3 句目〈明易のわれもむかしは木から木へ〉とか、それから31 句目〈金魚らは鼻のあたりでももの思ふ〉、37 句目〈金魚美し糞がなかなか切れずとも〉、それから67 句目の〈古代魚のかほとなりたる秋思かな〉なんてのは素敵な秋思ですよ。それから100 句目の〈方舟のやうな気がして北窓開く〉、で、この人はそういう意味ではとても俳句の作り方もずいぶん意識的で意図的で、金魚っていうふうなものを使ってね、何か自分の五七五の世界をつくる。何かを訴えようとしているわけじゃないんですね。五七五の言葉の世界をつくる、そこが戦争を詠んでいる俳句と僕は違うと思ってるんですね。だから僕は、この58 番という人の俳句は、なんかとても読ませる俳句だと思います。私たちが俳句を作る、若い時、僕もそうだったんだけど、自分で作ることに一生懸命だから、そっちだけに専念するんですけど、それはつまらない。どっかでやっぱり何か読んだ人の、一緒になって、読んだ人の世界が広がってくれるというふうなところに手が届かないといけないと思うんだけど、僕はその点で58 番の人はものすごくいい達成をしているなあと思って、だんだん何か58 番に肩入れし始めましたね。終わります。

西村 それでは、最後に大石委員長お願いいたします。

大石 私は29 番と、それから72 番を推しておりますが、29 番は今、坪内さんがおっしゃいましたように、この句っていうのは本当に高尚性っていうか、リズムだとかそれから調べだとか、そういう点からいくと、今この作品を読んだときには確かに面白い、わかったっていう、そういうところがあるんですけども、これをどれだけ自分の中で口ずさんで愛していけるかっていうことになるとちょっと心配なところもあるのです。でもその中でもこの作者がすごくいろんなことに挑戦して、文体のこともありますし、それから、自分の生き方そのものに関わるような内容を詠んでいる。そういう中で、自分の可能性っていうもの、それから俳句の可能性っていうものも、きっと試しながら、これでいいのかわいのかっていうふうに作っておいでではないかというふうに思います。季語がない、無季の句があるっていうのが、無季俳句が絶対、私、いけないというふうなことは言えないんですけど、やっぱり季語の持っている大きな世界、力っていうものを自分の句の中で生かして、それで損することはないわけですよ。ですからそういう点で、どうしても無季で書かないといけない句であるっていうことをこの作者はこれから自分で、そういう俳句作りをしていかれないといけないのではないかと、非常にしんどいところに踏み込んでおられるのではないかと半分同情したりもしております。具体的に、さっき触れられなかったんですけど、坪内さんが挙げられた句、それからこれはさっきウランのところでも出ましたし、金魚のところでも出ましたけれど、排泄に関する句がありますね、33 句目〈排泄をしようぜ冬の曇天下〉、それから34 句目〈滝のごとゲロを吐く月を背にして〉、こういうのはやっぱり少しグロテスクでありナンセンスであると思うんです。そしてあの、上品とは言いかねる作品世界だと思うんですけど、このところに、自分をぶつけていくということ、生き方そのもの、なんか俺という句があったり、

なんかかわいらしい句もあつたりするので女性かなあ男性かなあと思って読んでるんですけど、まあ、上品とは言いかねる作品世界だけれども、まあ、女の無頼、今は現代人でも無頼に生きる人ってのはなかなかないように聞きますけれど、そちらの方に、ひょっとしたら面白い作品世界が展開されるのではないか、また、この方のエネルギーでもってそっちを切り開いていかれたらどうかっていうそういう期待度もあって、再度、私は29番を推したいと思います。

それから72番ですね。さっき戦争のことがあって、坪内さんが戦争っていうものを体験として詠うのではなく、頭として理解している、知識として理解している、そういう戦争の世界ではないかとおっしゃって、あ、なるほどそういうことかっていうふうに、作品の中から戦争の俳句、反戦の俳句、そして告発の俳句のようなものを見ましても、もうひとつなんか押してくるものがないなあと思ってたんですけど、それはやっぱり知識としての戦争が詠まれているせいかと大いに納得しました。でもその中で、自分にとって戦争それから死というものをどういうふうに捉えているのかっていう、この作者の世界を推測いたしましてその作品を見ていきますと、これは取り上げられましたよね、59句目の〈戦場に窮屈すぎし枯野かな〉、この「枯野」の捉え方っていうのが非常に必然的に伝わってきます。それからその死ということ、自分の死というものを、別に戦争でなくても死はあるわけですけども、66句目の〈わが死には汝がつきそへ雪女郎〉、そしてその下の方に、95句目〈花筏流れきたれば供花とせよ〉っていう、こういう何か死の捉え方っていうのがこの方の、他にもありましたが、84句目〈戦士かつ殉教者とも唐椿〉でしょうか。それから90句目、これは取り上げられましたね、〈銃声と思ふまで亀鳴きにけり〉っていう、この銃声っていうのも別に戦争ばかりではないですけども、この戦きのようなものが何か全体に作品を貫いている、何かこう重い流れのようにして読みました。意外とこの古い季語、さっきあの、亀鳴くのことに取り上げられてましたけれど、75句目〈全言語下手なるままや粥柱〉、これはもう本当に、今もちろんあの、粥柱の神事なんかをしているところがあることはありますけども、私たちの生活の中からこういう季語は、もう消えかかっている季語ですね。それをなんて言うのでしょうか、面白がって詠み込む、それを捉えて、実際にご覧になった行事だったのかもしれないけど、こういうところに勇敢に挑戦していくっていう、その勇敢さっていうか、面白いと思いましたが、この中で私一番おもしろかったのは6句目ですね、さっき申しませんでしたけど、〈人喰ひし為体（ていたらく）にて大鯰〉、こういう句がもうちょっと並ぶと、さっき29番でも申しましたけど、無頼性っていうか、太々とした作品世界が広がっていくのではないかということのを少し思いました。以上でございます。

西村

ありがとうございました。芝不器男俳句新人賞は、3時30分には決定したいというふうに思っております。

今まで先生方の意見が一巡して、復習してみますと、今の段階では大石委員、城戸委員、齋藤委員が72番、二人、2点になっておりますが、大石先生、それから坪内先生が29番、それからもう1作品2点、齋藤先生と坪内先生が58番。

それぞれこの3編が複数点数になっております。1点になっておりますのが85番、81番、49番。城戸先生の85番、対馬委員は、いつもそうでございますけど、皆さんが選ばない作品、49番、81番というのを選んでます。

さあこれから最終決定の意見に入りたいと思いますけども、今までの先生方の議論を感じて、何か一言、フロアから言いたいことがある方、いらっしゃいますか。誰もありませんか。異存ありとか、俺はこうだとかですね、何でこれがこうなんだっていうことはいいですか。それでは時間の関係もございますので、またそういう場は後で、終わってから設けたいと思います。

最終的な絞り込みに入っていきたいと思いますが、まず、この主要な残った3編、72番、58番、29番ですが、この3編が基本的には・・・

坪内 いいですか、あの72番は僕が選んでないんですよ。

西村 ああそうか、58番、そうですね。

坪内 そうです。だから僕は72番はこの作品自体触れてないんですけどね。

西村 あ、失礼しました。大石先生と城戸先生でした72番は。あ、ちゃうか。

坪内 いえいえ、3人選んでおられるんですよ。

西村 大石、城戸、齋藤やなかったですか。そうですね。

坪内 そうです、そうです。それでね、僕が選ばなかった理由みたいなものをちょっと言わせてほしいんですけども。

西村 はい、わかりました。

坪内 僕は、なんていうんだろう、たとえばね、後ろの方を例にすると、97句目「奈落には奈落のおきて」、作者がある思いを言うんです、「奈落には奈落のおきて」。それから次の98句目「退化より進化の不安」とかね。そしてあと季語をくっつけます。こういう作り方が基本なんですね。で、僕ね、それがちょっと古いかなと思ってるわけです。83句目「心房はさびしきところ」。だから、作者の思いと季語をつけるっていうのは俳句の作り方の基本形なんだけど、そうするとね、作者の思いのところはかなり大胆でないと、なんとなく既視感というか今までの俳句の感じを引きずるわけですね。だからそのね、大胆さが不満なんですね。91句目なんかも「うつくしく人の壊れて」。なんかとても文学的な言い方ですよ、「うつくしく人の壊れて」、その文学的なところが曲者で、くさい、で、「シクラメン」とこう結びついてるでしょう。何となくうまくできてるっていう感じがするんです。41句目「戦争は発作にあらず」、だけど「戦争は発作にあらず」なんて誰かが既に言ったよなあという感じがして、それで「月に暈」と。

50句目「人間をとことん憎む」、そして「神の留守」と来るでしょう。だからもうその作り方がね、少し不満で。あのもちろんとても面白いなあと思うのは16句目〈蛸壺を出られず蛸やそのまま死〉なんていうのものすごく面白いと思ってます。え、そんなこと入ったら出られるよなと思いますけども、出られない蛸もいるというのはやっぱり意外な世界を教えてくれる。7句目なんかの〈冷奴もつと人間らしうせよ〉ってのはひっくり返した逆の形ですよ。ね。「もつと人間らしうせよ」というのと「冷奴」を結びつけていて、そのへんがやや不満。4句目は皆さんが言ったように僕も面白いと思ってる。それは大胆なことを言ったからです。「ウランよりウンコたのしよ」という大胆なことを言ったから。他はそういうわけで、僕は何となく推せないんです。そこを納得させていただいたらと思います。

西村 わかりました。納得させろ。齋藤慎爾さん、なんか答えないかんですね、齋藤委員。

齋藤 いやああのう、今度は説得できないんですよ（会場、笑）。いや、僕自身はだっても今でも迷ってるわけだから。実際に作品が、まあなんていうかな、数から言うとね、58番の方が数がちょっと、ほんの1句か2句上回るんですよ。僕はだいたい72番を推そうと思うんですけども。それで58番は確かに平均的に良くできててね、これはみんな納得するんじゃないかな、そんなにめちゃくちゃな冒険はない代わりに古風でもないしね、ちゃんとそれぞれ、58番の人は。だからこういうのを推すのが一番、本当はいいんだろうけども、やっぱり72番がね、とにかくそういう、あのもう、不器用なんだよね。けども僕はあれなんですよ。この人は戦争とか何とか詠んでるけども、要するに今の戦争なんか考えない、僕がそれ言うからこの人にマイナスになっちゃうと思うんですよ、この作者にね。でも何度も言うとおりに、僕なんか考えてる戦争っていうのはいわば人と人との争いとかそれでもいいんだけど、結局戦争っていうのは政治の失敗ですよ。憎しみじゃないんですよ、ああいうものは。憎しみでも何でもなし、あくまでも政治が原因ですよ、戦争っていうものはね。ほんのささやかなことから戦争ってのは起こるわけですよ。というようなことで戦争観の変更を迫るようなものがね、僕はこの中に少なくとも感じられると思うからそれはやっぱり進化じゃないかと思うわけよね。戦争ってのはすごく古典的な戦争じゃないんですよ、この人たちは。今の戦争ってのは向こうに敵がいるからその敵に突っ込めっていう、そういうはっきり敵ってものが分かればいいけども今は違うわけよね。ものすごいデータを駆使して、いろんな電卓を叩いたりコンピュータを叩いたうえに出てくる、にじみ出てくるのが敵っていうか戦争の正体なんですよ。それがこの人の中にどっか僕はあのう、60句目〈アフガンの起伏に富める蒲団かな〉っていう日常寝たりする蒲団なんかからこういうふうに「アフガンの起伏に富める」っていうふうに、そういう風土にまでも連想する、それからたとえば53句目に〈世界貿易センター跡や雪間とも〉、世界貿易センターっていうのは例の「9.11」でそれこそ二つのビルがたちまち崩れ去ったわけけども、その跡を彼は

見に行ったかどうか知らないけども、それを「雪間」っていうふうにね、これ坪内さんまたつまんない季語を持ってきやがってって怒るかもしれないけど、いやあこれ僕はね、「雪間」って、これはやっぱり、僕は初めはとらなかつたんだけど、今ちらっと見たら、うん、こういうのはやっぱりいいわけよね。貿易センターを「雪間」と見るなんていうのはね、これは何というか、皮肉って言うよりはやっぱり雪の多いところに住んでいる人の悲しみなんかもあるしね、越後の人が詠ったと思ってもいいわけだし。で、まあ僕はあれですね、そういう未完成のものを含めながら、やっぱりこういうのを推したいって気がありますね。

西村 なんとなくこの、ぐっと58番に傾きかかったわけですけど、まあ踏ん張って齋藤慎爾さんが推す気だとおっしゃいました。城戸委員、72番を推してますよね。

城戸 はい。坪内委員のご指摘は全くそのとおりでと思うんですが、一方で、なんでしょうね、戦争が体験ではなくてすでにイメージになってしまったこの世界観というものが逆に表明されてるって考えることも可能じゃないでしょうか。たとえばそれが53句目「世界貿易センター」ですよ、まさに。あるいは55句目〈核の冬まであの人を待ってゐる〉、あるいは59句目〈戦場に窮屈すぎし枯野かな〉とこういったものに表れているんじゃないかと思います。別にね、戦争や反戦といった問題は、実は齋藤さんが推された2番の作品でしたっけ、非常に沖縄を、ずいぶん舞台にして、むしろ徹底的に戦争にまつわる作品群ということになっていたと思うんですけども、72番はけっして戦争詠が中心になっているわけではないって、それがまさに4句目〈ウランよりウンコたのしよ夏の草〉とか、47句目〈白桃を剥けば剥くほど自失せる〉とか、あるいは86句目〈涅槃図のものごとく死に絶えき〉とか、そういった作品の中に、ああ、あと66句目〈わが死には汝がつきそへ雪女郎〉とか、これもやっぱりモチーフ自体の幅の広さっていうものと同時に、イメージとしての戦争に触れざるを得ない現代人としての宿命みたいなものが、やはり評価すべきじゃないかと思います。

西村 はい、それでですね、58番も72番も29番も選んでない対馬委員はこれに對してどう、あれしますか。

対馬 なぜ選ばなかったかということをお話なくしてはいけなくなってしまうのがちょっと辛いんですけど……

まず29番はですね、ここまで並んでるとインパクトはありますが、一句として見た時にどうなんだろうとか、句集になった時に、句集で、こう開いたときにはたして私はこういう句を選ぶだろうかとか、あと句会で選ぶだろうか考えた時に、選ばないかなと思って29番は選ばなかったのですが。確かにチェックはしてですね、面白い句がありました。67句目〈あなたがある二畳のホットカーペット〉とかですね、思わず笑ってしまうような。次の68句目も〈机を蹴

る机を叩く私は蚊ぢやない〉とか、本当に意表をつく感覚的な面白さっていうのがこの全体を通してあるので、とは思ったんですが。ま、そうですねえ・・・

西村 あのと29番はともかく、72番はどうでしょう。

対馬 ともかく72番、72番も、感覚的なところは割と共感するところがあったのですが、坪内さんが言ったように、ちょっとこう、くさいってところが目についてですね、たとえば、3句目〈重力のかたまりとして莓かな〉とか、「かたまりとして」はやや言い古されているような、2句目〈ぼうたんの天上天下すべてやみ〉、これもなんかちょっとバツかなあと思いながら。72番は、これも全体的な100句の勝利かなっていう気がして、今聞いていました。この作者の世界にちゃんと入っていけるものを100句選んで並べたその強みってところは感じましたね。でも、確かにおっしゃったようにただ単に戦争とか反戦とか、そういうテーマ性を主張した句だけでなく、66句目〈わが死には汝がつきそへ雪女郎〉とか、これだけ読むと本当に呉夫さんの句かとも思うような、なかなか斬新な句もあるので、皆さんの話を聞きながらなるほどとは思ったんですけど、そうですねえ、たとえばこの作者が今、20代、30代を代表する作者となるという決意ですか、選ぶ決意がちょっと私にはまだ、どう納得させようかなと思ってるところなんです。

西村 ということでございますが。

対馬 で、58番。58番は、言葉の一つ一つの、一句に仕上げるうまさ、うまい下手の、悪い意味のうまさじゃなく、きちんと面白みに持っていくうまさっていうのは十分味わえる作者ですね。でもそれもまた同じでですね、そうですね、31句目〈金魚らは鼻のあたりでももの思ふ〉って、この句は選んだのですが、一句の独立性ですかね。ちゃんと独立していますか。まあ面白いんですけどもね。そうですね、私72番だったら58番の方が肩入れするかなと思います。

西村 あのを、私はこういうプロセスを取ろうと思います。3時半にはこれはもう決めないけませんので、3時半には各委員に、芝不器男俳句新人賞をどれにするか1編、出していただいて、それで、満場一致であればよろしゅうございますし、一番多くの、過半数が支持したものを芝不器男俳句新人賞にするのが良いと思うのですが、委員長よろしゅうございますでしょうか。

大石 はい。

西村 あとですね、やはり今、72番ばかりあれしてますけども、58番、それから29番も当然これ残ってますので、これについてコメントをしていただけますでしょうか。ええと、坪内先生、58番のサポーターング・・・

坪内 いや、僕は58番はもう言ったので、もし、大石さんとか城戸さんとか・・・

西村 最後に大石先生、最後に意見を言っていただくことにして、まず城戸さん、城戸さんはあと85番を推しておられますよね。城戸さんは72番と85番ですよ。85番に対するコメントはよろしゅうございますか。85番を芝賞に推すべきだという。

城戸 ええと、やはり開いてみると面白いですね。そうですね、やはりこの身体感覚と観念の出会い方、それからたとえば3句目、先ほども言いましたが〈日向ぼこ世界征服とか狙う〉なんていう、何でしょう、サブカルチャー世代の感覚とか。16句目〈恋人はサンタクロースなので留守〉とか、やはり感覚が非常に新しい鋭角を持って、それが十七音にあるエッジを与えているというふうに思うんですね。そういう意味ではどうなんでしょうねえ、80句目〈鶏頭が夜を含んでいたなんて〉っていうのも、何か言いきらない部分に、余韻ではない何か深い闇を感じる瞬間もあり、大変やはり面白い作者だと思います。個人的には11句目〈白鳥が白くてどうでもよくて好き〉って、このね、「どうでもよくて」なんていう部分の感覚は、やはり旧来にはなかったもんじゃないかってのが偽らざるところですよ。

西村 はい、それでは齋藤先生、58番についてのポジティブな支援を簡単をお願いします。

齋藤 85番も良いものあるねって。うん。

西村 あれ、先生、85番選んでないのに58番は・・・

齋藤 いや、85番は最初、坪内さんとさあ、城戸君も選んでるよね。たとえばこれ今回の全部の中でもね、85番の44句目〈憂鬱な薔薇と書かれた既往歴〉なんていうのはさあ、うまいよ、これ。憂鬱って字も書きにくいし薔薇という字だってあれでしょ、書ける人いないんだから。それからたとえば86句目〈芒束ねて忘却曲線上に居る〉なんていうのは、僕は大好きですよ。このくらいの作品を作れば85番素晴らしかったんだけど、そんなに傑作があるわけではないので、あれです。

ええとそれで、72番？

西村 72番と58番。もう今はですね、最後の一票を投ずる時、他の選考委員をどう説得するかということですね、あとは自分で一票を行使する・・・

齋藤 みんなが言うように、たとえば59句目〈戦場に窮屈すぎし枯野かな〉とか、60句目「アフガンの起伏に」とか、戦争っていうものをね、要するにみんな誤解なんだ。あのね、戦争はとにかく新聞とかテレビで見るように、外国の彼方で

行われている、砂漠の彼方で行われているもんじゃないってことをね、本当に我々の身近で、日常のある行為とか、ある何かを選択する、そのことで実は我々はもう戦争に加担しているんだということがね、全体から感じられるってことなんですよ。要するに身近なものなんです。もうそれは蒲団で寝そべって何か夢想すること自体がもう、というわけで。そういうことをやっぱり言いたいよね。で、そういうのがどこかこれ感じられるっていうことなんですよ、僕は。

西村 わかりました。それでは、対馬委員。対馬委員は49番、81番、どれを芝不器男賞に推すべきだと、他の選考委員に言ってください。

対馬 ああ、まあ両方推したいんですけども、より、じゃあどっちか選べといたら、じゃあ81番はいかがなんでしょうか。72番とか58番より81番の方が良いという判断はどこなのかということですけど、いっぱいいい句があると思うんですよね。前衛的面白さというか、13句目〈風船に尻載せてゐる少女歌手〉ってシニカルな感じですよ。そうかと思うと、22句目〈水脈の末端として夜の新樹〉とか、こう全体に堂々として、しかも俳句を詠む上での人間の影の部分もあると思いますし、句集になった時にすごくいい句が並んでるんじゃないかと思ったんですが。

齋藤 いやあのね、そういう意味では傑作っていえばね、この人もやっぱり八つぐらいはすごい句があるよ。81番の、たとえばね、35句目〈白百合よコロスは井戸のやうに在り〉、それから41句目〈この穴を所有してゐる天の蟬〉、それから58句目〈十万億土に秋の団扇がひとつきり〉、それから最後の方に99句目〈大寒の鏡より出て鏡を拭く〉、それから100句目〈月と日にわれてあはぬよ枯木山〉とかね。すごい句ありますよね、確かに。それから23句目〈五月闇とは畳まれし帆のやうに〉ってのはうまいと思わない。こういう本当にこの人もすごいんだけど、数が少ないんだよ、やっぱり。

西村 でも対馬康子委員はこの人を推すんですか。

対馬 うーん、毎回最後まで頑張ってもあれなんですけど、ちょっと考えさせて下さい。

西村 それでは最後、あと5分でございます。大石委員長のご意見をいただきたいと思ひます。

大石 まとめなくても私の意見でよろしいんでしょうか。

西村 あとまとめるのは、投票をしたらどうでしょうか。あるいは、たぶん、それでもう行かないと決まらないと思ひます。ですから最後に説得を試みて下さい。

大石 はい。私はもう本当に皆さんのお話を聞いてて、こっちもそうだ、あっちもそうだと思う、もう今混乱の極みにいるんですけど、72番の反戦、戦争、そういうものに魅力はあるんですけど、何かこう観念的な、こうだよっていうふうな知識として入ってきた戦争が詠まれているような、そんななんか、よく読んでみますとそういうふうな気がしてならなくなりました。

それに比べて29番の方は、もう全く自分の肉声でもって、詠いまくってるっていかそんな感じがしますね。ですからこの方にとって嘘はひとつもないわけで、嘘がなくて全てが真実、体験した真実、それが声となって、俳句となって出てきてる。その強さってというか、強みってものが感じられて、また29番の方に傾きかけております。68句目〈机を蹴る机を叩く私は蚊ぢやない〉、これも全く肉声ですよ。そして、そうかと思うと優しい句で70句目〈こないだはごめんなさい春雷だったの〉、こういう発想、そして優しいけれどもしたたかに生きている若い人の声。なんかあの、全然この方にとって嘘がないってところが、あの・・・

西村 わかりました。なんかマイク握ってますね、対馬委員。

対馬 いや、あのですね、詠みたいものに嘘はないというのはわかるんですけども、じゃあこの口語調ですよ、それを正賞に推すスタンスってというのはどうなんでしょうか。あの、大丈夫というか、大丈夫なんでしょうか。

大石 そうですねえ、そのところはやっぱりあの・・・

対馬 俳句というのは定型詩、本来、定型詩としての、短詩型としての型ですよ。

大石 それはもう、この作品を最初に読んだ時からそれを思っていました。あの、前の時にも、常にこの100句の作品っていうのは一冊の句集になるのだという前提のもとに選考し、討議してきたと思うんですけど、何か、第1回目の作品は大変重厚な作品でしたし、第2回目は少し優しい感じの日常詠のような作品でした。ここでなんか少し変わってもいいのではないかというその、起承転結の転のところに来ているような気がして、どうしてもこれで推したいっていう他にいわゆる格調高い定型の作品がもうひとつ見当たらなかったの、私はこれに非常に心惹かれたというわけです。

西村 あと何か、はい、坪内さん。

坪内 僕はあの、大石さんが29番を推すんだったら、僕もこれを推していてもいいなと実は思ってるんですね。つまりあの、こういう、あるハチャメチャかもしれないけども、そういうものが持っている可能性みたいなものを開くっていうのが、この芝不器男新人賞としては相応しいような気がしないでもない。確かに無季だし、非定型のものもあるし、そういうのは、芝不器男はきちっとした定型俳人で

したから違いますけど、だけど俳句の新しさということで芝不器男は存在感を持って人だから、新しさに挑む人っていうのはどんどん認めていいんじゃないかなあと僕は思います。

西村 はい、わかりました。それでは、それぞれの選考委員から、それぞれの作家の良心にかけて今まで意見を開陳されました。そして、他の委員を説得する意見を今まで述べられました。従って、作家の良心に従って説得されるのもこれも作家の器量であろうかと思えます。従って、自分が推薦した番号に囚われる必要は全くございません。自分が2編出してるから、最後まで俺はこれを推さなあかんのやちゅう頑迷なことは我々の委員会とはとらない。という前提です、以上挙げた最終選考の中から1編、ちょっと紙に書いていただいて、そして、集めてください。もう言う？手を挙げます？挙手？書いた方がいいんじゃないですか。ただし割れて過半数にならない場合は、2編で決選投票。ちょっと事務局、紙を・・・

対馬 ちょっとさっきの話に戻りますけど、口語調とか無季だから新しいとかって言えるんでしょうか。

西村 そう、そうやって説得してますからね、

齋藤 いや、それは今の、全くそうなんだよね。あの、そういう形がだってやっぱりね・・・たとえば29番の終りの方に、97句目〈紫蘇ジュースがぶがぶ飲み泣くな泣くなよ〉、これをね、つまり俳句としてっていう、それから次のだって、98句目〈俗っぽい映画を観た。(まる)さて、(てん)枯野に行こう。〉、やっぱりその、僕は無季だとか自由律はいいんだけど、まあでも自由律だってね、つまりあれはやっぱり定型律ですよ。ここまでいったいいじゃああれしていいのかっていうことですよ。「俗っぽい映画を見た。(まる)さて、枯野に行こう。」

西村 はい。それでは、記名投票してください。各委員の名前と、何番を自分は芝賞に推すかというのを書いて、事務局は集めてください。過半数を制したものが、芝不器男新人賞の歴史の中に名を連ねるということになります。

西村 よろしゅうございますか、はい、集めてください。

西村 絶対過半数なれへんのや。

西村 あっ！おお、おお～。
それでは、発表させていただきます。順番にですね、まず先ほどの順番。
城戸朱理委員、29番。
齋藤委員、72番。
対馬委員、81番。
全部割れてる。

坪内委員、29番。

大石委員長、29番。

従いまして、芝不器男俳句新人賞、第3回受賞者は以上のようにございますが、委員長、よろしゅうございますでしょうか。

大石 はい。ええと、お名前を明かしていただけるのでしょうか。

西村 それでは、事務局から、受賞者の発表をしていただきたいと思います。発表をお願いします。新人賞。どなたでしょう。

事務局 それでは29番、大阪府、御中虫さん。おめでとうございます。

(会場内、拍手)

西村 来ておられますかね。

事務局 いらっしゃいますか。

西村 あ～残念。

事務局 起立していただければ。

西村 おられますか。

(御中虫さん、起立)

西村 あー！来てはった。おお～！おめでとうございます。

(会場内、拍手)

西村 それではですね、本賞が決まりましたので、それぞれの委員の賞の発表にいきたいと思います。それぞれの委員の奨励賞を順番に発表していただきたいと思います。それも先ほどの順番どおり、大石委員長を最後に、まず、城戸朱理委員お願いいたします。

城戸 じゃあ、85番で。

西村 85番。それでは事務局、発表をお願いいたします。

事務局 はい、85番、愛媛県、岡田一実さん。

(岡田一実さん、起立。会場内、拍手)

西村 おめでとうございます。おお、おられた。
それでは、齋藤慎爾委員お願いいたします。

齋藤 あのう、なんか2番の人、これ沖縄の人って感じがあるんだけど、まあそれは
おいて、ずっとあれしてるから72番です。

西村 はい、事務局、お願いいたします。

事務局 はい、72番、神奈川県、堀田善宇さん。

(堀田善宇さん、起立。会場内、拍手)

西村 お、おめでとうございます。
それでは、対馬康子委員お願いします。

対馬 じゃあ、あのう、私の中で二重丸が多かったということで、最後まで推した8
1番にします。

事務局 はい、81番、東京都、中村安伸さん。

(中村安伸さん、起立。会場内、拍手)

西村 お、おめでとうございます。
坪内委員お願いいたします。

坪内 あの、58番。

西村 はい。

事務局 58番、大阪府、高岸容子さん。

(高岸容子さん、起立。会場内、拍手)

西村 あ！全員来ておられる。うわ～！
それでは大石委員長、お願いいたします。

大石 はい、あの、ダブらない方がいいんですよね。

西村 ダブらない方がいいです。

大石 ですね、どうしましょう。

対馬 みんな選ばれちゃったよね。

大石 みんな、みんなその・・・

西村 全然今までにですね、あれ、こだわる必要ないですよ。いま、齋藤委員が2番とか言いかかりましたけど、全然、2番、今回推薦してないけど、この場ではね。それはもう囚われない。

さあ、ドキドキ、最後の一人です。

大石 ええと、12番を頂戴します。

西村 12番。

大石 はい。

事務局 12番、宮城県、成田一子さん。

(会場内、拍手)

西村 おられますか？さすがに宮城県からは来ておられませんか。

大石 新人賞とそれから奨励賞が決まりまして、初めにお約束がありましたように、参与の方から特別賞を発表していただきます。お願いいたします。

西村 はい、それでは事務局、特別賞を配布してください。

配布されるまでにですね、私は特別賞の趣旨を発表させていただきたいと思います。残念ながら今回、この賞を逸させられた予選通過者の方々がおられます。しかし、予選通過者の方々は、この芝不器男俳句新人賞の予選を通過したこと自体、大変な、俳句におけるひとつの登竜門を突破されたという意味においてですね、立派な業績であると我々は考えております。この特別賞というのは、予選を突破しなかった方、これはですね、予選を突破しないには理由があるわけなんです。それは、先生方のお眼鏡にかなう最低のレベルの、いわゆるいい作品をクリアしていないということではありません。それは、予選を突破できないような悪い作品がたくさんあったために、どんなにいい作品を書いても予選を突破できなかったという方もたくさんおられるわけでありまして、従いまして、これは皆さんに対するメッセージも込めまして、非予選通過者の中から選ばせていただきました。そしてこのことは何を意味しているかということ、芝不器男俳句賞の本賞はここに決まりましたけど、しかし俺たちの芝俳句賞っていうのは当然皆さん

の中で、この予選の30編も出てるわけですから、今回あれしたけど、俺やったらこいつが芝俳句賞やないかなあというような議論が大いに盛り上がり、そして、みんなの間です、俺たちの芝不器男俳句新人賞というものが連なっていくというようなことも、大いに我々としてはウェルカムしたいという意味も込めてですね、選ばせていただきました。

それで、この60番の方を選ばせていただきました。非常に、あの、まあたぶん予選を通過しないだろうという作品が、まあ、問題作が約30編ぐらいありますので、あの、たぶんこれは予選を通過しないと思いますが、この方はですね、心の底から怒っておられます。そしてですね、まあ、従来型の日本人的なつきあい、それから紐帯というのを否定しておりますが、しかし縄文人のような原日本人的な発想の中で、信じあう者との間の強い紐帯を望んだ未完成、不健全、裸の叫び、ニヒリズム、リアリズム、不気味、という作品を作っております。たとえば、3句目〈仔鼠をそっと握らば腸(わた)温し〉、6句目〈良質の毛皮となりしいのちかな〉、8句目〈瞳孔を開ひて閉ぢて兎ら遊ぶ〉、あ、まだ名前あとで発表します。10句目〈時空をば歪めて遊ぶ金魚かな〉、それから、ええとですねえ、まあずっといろいろいいのがあるんですけども、この、親子の関係を出色の詠った作品、37句目〈父子ふたり鹿殺したる絆かな〉、それから、現代の社会に対する強烈な批判、70句目〈死にゆく人間にさへもヒエラルキイ〉、77句目〈鯉のぼり兄、姉となり早十年〉、85句目〈没日すでに群青の犬が唾へけり〉、というようなですね、まあ、このほかにもいろいろいい作品、それから35句目〈いつまでも黙ってあるなあをぞらよ〉、それから36句目〈牝牛が怒れる乳を放射せり〉。ま、こういうふうですね、普通に妥協しない、しかし信じあいたいというようなものを詠っている。非予選通過の仲間がたくさんいて、で、彼らが捲土重来を期している、いうことを祝してですね、私はこれを西村我尼吾の特別賞に推薦したいと思います。はい、それでお名前を発表してください。

大石 じゃ、事務局の方から、受賞者の方のお名前を発表してください。

事務局 はい、それでは60番、滋賀県、園田源二郎さんです。

西村 ま、絶対いてはらへんと思いますね。予選非通過ですから。(笑)

で、ちょうどですね、時間があと15分になりました。先生方から、もう選ばれた理由というのは、これだけ議論してるから、もういいと思います。もう、奨励賞はなるほどそうなんだと思います。重要なのはですね、今回ここに来ておられておりながらですね、まだ先生のコメントをもらっておられない方がおる、これは絶対もらわな。あとの15分間で、先生方にコメントをもらいたいと思います。まず、1番の作品について、城戸委員お願いします。

城戸 はい、ええと1番は、無季、自由律の作品で、まあだいたい皆さん手を挙げてくださらなかったんで私が推したんですけども、この、どこかまだ、自由律であるってのは要するに、俳句が俳句である根拠ってものをすべてかなぐり捨てた

そこから始めなければならぬわけですから、何故これが俳句であるかっのを常に自分に問い直していかなければならない。その場合は結局、俳諧ってものがなぜ生まれたか、和歌的な主題とは違うものってのが本来の俳句の俳の意味ですから、それがどれだけ熟練して達成されてるかっていう部分が問われるかと思うんですが、その部分では少しあまりにも生々しく、まだ未完成のものがやや多かったかなって印象はあります。一方でたとえば51句目〈遺児のため二月の詩集燃やす〉、76句目〈二月ただ傷口に燐寸(マッチ)捨てよ〉なんてこう、どっか寺山修司を一瞬思わせるような作風で、同時に70句目〈少女に雨の匂いともす〉、74句目〈自殺者の遺失物さす月明り〉、こういった作品には観念ではない事物のリアリティっていうものを感じました。どうかこの方向で、ずっとこの作者にはもっと突き詰めてってもらいたいなと思います。

西村 はい、ありがとうございます。次は6番・・・

坪内 ちょっと一言。僕、気づいたことがあるんです。あのね、面白い試みなんですけどね、上と下に二つに分かれるんですね、だいたい句の構造がね。1句目「夜の銃声のために」、「マッチ擦る」。それで「に」がいっぱい出てくるの。もう「に」だらけ。ずーっと見てもらったらわかるけど。「に」で折れるんですね。だからそこが克服されると違うものになるかなあと・・・

西村 いやあ、いいアドバイスをいただきました。ありがとうございます。次は6番、齋藤慎爾委員、コメントをお願いします。

齋藤 6番ねえ、なんか僕、これ選んだっけ？

西村 6番選んでますよ、予選の時に。

齋藤 そうだった？ そうだなあ、あのね、26句目〈芍薬の匂ひの如き昔かな〉とか30句目〈だんだんと小さくなりて草蛩〉、48句目〈遙かなる昔へ還る昼寝覚〉、56句目〈海原のひかり滴る夏蜜柑〉、それから67句目〈ぎらぎらと照らされてある月見かな〉、70句目〈身の内へひやりと迫る枯葉かな〉って、こういうのを採りました。で、全部で何十句か採ってたんですけどね。

西村 そうそう、これ、齋藤先生ものすごく推してたやつですよ。

齋藤 うん。

西村 なんかひとつ。

齋藤　もうねえ、何て言うか、さっきの五つ選ぶ方にばかり行ってたからさ。うーん、でもなんかあの、あれですね、「昔」っていうのが僕が選んだだけでもあるよね、5句目にも〈七草薺嚙して遠き昔かな〉っていう、うん・・・

西村　はい、それではね、次のやつ行きます。7番。これはもう、あの、城戸さん。

城戸　ええと、7番は有季定型で、骨格も骨太ならば、どこか情景が目に浮かぶような、ひとつの土地に根ざして生きてきた人のある力強さのようなものを感じました。たとえば9句目〈指先を柔らかくして若葉摘む〉、10句目〈どんと焼静かな村の小一時〉、それからええと、17句目なんかも非常に鮮やかじゃないでしょうか、〈眉太き赤児生まれし山笑ふ〉。どこかちょっとこのう、骨太なんだけれども、あのう、少しく常套的に過ぎるっていう部分もありますが、にもかかわらず、何でしょう、やはりその、地霊との語り合っているのを感じる。ひとつの土地に根ざして生きてきた人の姿ってものを感じるところが惹かれました。70句目〈弓なりに月を見上げる赤児かな〉なんてのもかわいいですね。ええ、100句目はちょっとユーモアがあるんじゃないでしょうか。〈をところにも乳房ありけり雪女郎〉。

西村　ありがとうございます。それでは9番、大石先生お願いします。

大石　ええと、あの、しっかりした句だと思って、たくさん〇をつけております。俳句的な詠み方、俳句的な手法、俳句的な処理っていうのがなかなかうまい、達者な人だと思いました。まああの、俳句的ってところがちょっと、あの、全部誉めてるわけではないので。1句目〈澄む川に沿うて酒蔵十ばかり〉、それから4句目〈鯉跳んでいよいよ月の待たれけり〉、こういうのはなんか、どっかで聞いたような気がするんですけど、なんかあのう、それでもきちんとできているかと思えます。41句目〈餅間の朝のしづかな色町よ〉、こういうのは手だれの句だなと思いました。それから57句目〈目刺焼く電車通れば窓鳴つて〉、庶民性っていうことですが、あの、「目刺」「焼く」、それから電車の線路に近いところにお住まいなんでしょうね、そういう日常的な、庶民の日常っていうのがね、親しく目が向けられていて、共感するものがありました。

西村　ありがとうございます。対馬委員、何かコメントありますか。

対馬　あ、いいですよ。

西村　いいですか、それでは、ええとですね、14番、坪内委員、お願いいたします。

坪内　ええと14番の人の、口語俳句って言ったらいいんでしょうかねえ、一応五七五なんですけど、ちょっと口語の俳句で、それは僕、試みとしてとても大事なことだと思うんです。たとえば6句目の〈出来るだけ蜜柑の転びますように〉と

か、11句目の〈わがままで金魚のようなことを言う〉、何となくおかしいでしょ、この人の。29句目〈明智さんあの蜥蜴泣いてますよ〉、57句目〈春風という無関心君がいる〉、60句目〈春の水見ていたら影が落ちた〉、69句目〈夏木立猫を三匹飼っている〉、87句目〈木の椅子を置けばたちまち月となり〉、96句目〈晩夏光ときどき不謹慎だった〉、これものすごいおもしろいですよね。こういうのが20あったら、ものすごく推せたんです。ぜひまた挑んでほしいなあと思います。

西村 ありがとうございます。それでは17番、齋藤委員お願いします。

齋藤 ええと8句目のね、〈哲学を愛す蜃気楼を愛す〉ってのはいいですね。「哲学」と「蜃気楼」、同じようなもんですね。それから、48句目〈未完とは永遠太宰治の忌〉、それから49句目〈金魚より不自由かなと思ふとき〉、ええとあとなんだっけな、69句目〈流星のごとき十代二十代〉ってのもあれですよ。それから87句目〈狐火やまた回り道してしまふ〉ってのも好きですね、僕。それから99句目〈凍蝶に心読まれてしまひけり〉ってのはまあ、まあありきたりと言えどありきたりかもしれないけど。いくつかやっぱり注目した句がありました。

西村 ええ、皆さん、ちゃんと読んでますからね。100句出せば。必ず読む、選考委員は、何回もね。読んでますよ。
はい、その次いきます。20番、また大石先生お願いします。

大石 20番、これあの、すごく気になるっていうか、女性の作品で、1句目〈妊りを母に伝えて月の道〉っていう、こういう状況から子どもさんは生まれて、そして職業を持ってる人なんですよ。30句目〈春闘の列のしんがり歩きけり〉って、この人は子育てをしながらお勤めをして春闘にも参加しているっていう、こういうタフな、そのお母さんが、45句目〈朝顔や子が耳元にささやきて〉っていう、こういう幸せをかみしめている。それからそういう展開で最後まで行くんですけど、なんて言うんでしょうか、この方の境遇に共感し、それからこういう状況でも作品を詠んでいらっしゃるってことにエールを送りたいと思って、いただきました。

西村 ちょっとね、ひとり忘れておまして、大石先生が大石賞に選びました12番について、これあんまり先生、まだ語ってないので語ってください。

大石 はい、12番。そうですね、好きな作品が割と多かったものですから。4句目〈抽斗にモデルガンあり雁帰る〉、それから9句目〈朝桜ダムの放水はじまれり〉、それからええと40句目〈向日葵や極左の赤いペンキ文字〉、それから51句目〈リネン室にシーツ山積み夏をはる〉、このあたりに印をしておりますが。あの、あるかもしれませんが、感覚的に好きだったのは61句目〈桃一個ナイフ一本冷やしおく〉、それからあのう、さっき発表があつて東北の方だということが分か

ったんですけれど、93句目〈ビーカーの中の対流雪降り〉って、非常に詩的な一句がございます。それから98句目の〈大寒や黒きレザーに鋏を打つ〉、なんかこう現代性っていうかそういうものを感じて、女性だとは思わずにいただきました。

西村 よろしゅうございますか。それでは26番、また齋藤委員お願いします。

齋藤 ええ、12句目〈涅槃会や雲を動かす風わずか〉、18句目〈陽炎へ不思議の国のアリスかな〉、19句目〈本心はほたる袋に隠しけり〉、あと33句目〈それぞれの日傘の中にある時間〉、37句目〈夏めくや通勤時間だけの空〉、ええとあとは、○つけたのは他にこれもあるんだけどな、65句目〈稲妻と音のあはひの闇ふかし〉、67句目〈蕎麦刈るや平らな空となりにけり〉、83句目〈冬の星水のほひの窓辺かな〉っていう感じかな。

大石 あのいいですか、私もこれ・・・

西村 そうですね、大石先生も。

大石 あの、20句目〈夏の月どこにも売つてゐない色〉、それからその下、44句目〈足し算はパセリのみじん切りの色〉、それから48句目〈秋夕焼無口になつてしまふ色〉、その他にも70句目、97句目という、こういうふうパターンというか自己模倣の形もありますけど、本当はこの「色」っていうこのところできちっと押さえないと、形象化しないといけないのではないかということをごここに書いております。

齋藤 ずいぶん「色」を使ってるね。ずら一と「色」を使ってるね。

大石 そうなんですね。だからここで、なんか逃げちゃいけないと私は思うんですけど。

西村 なるほどね。ええと次は53番。しばらく黙ってますんで、対馬委員。

対馬 ええと、53番はなんか、すつとぼけた面白さというのがなんか一句一句にあるなと思って。たとえばですね、40句目〈日盛やチャーハンにつく紅生姜〉って、なんかチャーハン見るたびに思いだしそうな句だなと思ったりですね、と思えば19句目〈若葉風死もまた文学でありぬ〉って、なんかこう、若者らしさを突きつめた句もあり、あと62句目〈知らぬ子に夫を貸しけり運動会〉って、ああそうだな、こんなことを詠んだ句も初めてだなと思って、おもしろいなと思って採りました。

西村 はい、ええと、それではですね、次、63番。これまた大石委員、対馬委員。大石先生。

大石 はい。この方は一定の完成、というか水準の作品じゃないかというふうここに書いておられますが、あの、最初面白いと思ったんですがなんか2度、3度読んできるとだんだん、ちょっとこう、つまらなくなって申し訳なかったんです。あの、その中でも面白かったの、面白いというか○をしておりますのが、7句目〈落花踏むなり象の足犀の足〉、見えますね、見えてきますよね。それから、20句目〈消火器の上の窓から夕焼ける〉、ああそうかと思ったり、それから67句目〈黒髪にからめて滝を持ち帰る〉、これ滝にね、打たれた、まあ女性だろうと思うのですが、こういう、この感覚は好きでしたね。

西村 じゃ、対馬委員はなんかございますか。

対馬 あのまあ、今日の本賞に選ばれたというのが、大石先生が今回は転の、転換期だったっておっしゃったんですけど、やはりこういう有季定型で王道を行ってるような句は、やはり今回影が薄くなりがちだったのかなって、ちょっと損したかなっていうことは思いましたが、ちゃんとよく出来上がってる句が多かったなあと思ってます。ええと、面白いなと思ったのが88句目〈高島屋通り過ぎたる聖夜かな〉、まああの高島屋なんか持ってくるっていうのもなんか試みを感じましたし、42句目〈湯のなかに柚子を投げ入れたる音よ〉っていうのもすごく惹かれました。だから、さりげないですけども心に残った句があった番号です。

西村 それでは64番、坪内委員お願いいたします。

坪内 ええと64番、実はこの人もとても好きな人だったんです。8句目の〈ねと言つてやわらかなこと雲に鳥〉、それから11句目〈引き抜かれ忘れられたる野蒜かな〉、それから一番好きなのは34句目〈男来る喉仏まで日焼けして〉、なんかとても男が良く見える。あの、こういうとても好きな、それからもうひとつ70句目の〈菜黄食みて鳥の時間が欲しいよと〉、なんか、ずっとあの、季語ですけども、季語という自然の物を介して自分も自然になっていくっていう心の動きがとても素敵で、本当はこの人も推すべきだったかなと思いつつ見えています。

西村 はい、それでは69番。齋藤先生と坪内先生。

齋藤 この人も、僕はかなり採ってますよ、うん。あの、すごくいい俳句たくさんあるのね。7句目〈梅を見ていて頭蓋骨白くなる〉、それから37句目〈黒蝶や水たつぷりと太平洋〉。で、ちょっと、ぎょつとしたって言うのかこんなふうな人、詠ったことあるかしら、38句目〈母老いて顔を濡らさず泳ぎけり〉、ねえ、このお母さんっての、これ詠んだ人ってのはどういう関係なのかって感じだよ、これね。それから57句目〈体内の海に月光満つるかな〉、で、59句目〈秋蝶

や巨大壁画の天使の死〉、それから62句目〈流星を待つ弟の首の骨〉、こういうのは面白いですね。76句目〈深海に雪降る夜の紅茶かな〉、83句目〈風花や火傷の舌を隠し持つ〉。それで一番僕が感心したのは、95句目〈死火山に雪降り積もり閉架図書〉っていうの。「死火山に雪降り積も」と、その図書館との、しかも図書館はその、開架図書じゃないんだよねこれ「閉架図書」、で、こう「死火山に雪降り積もり」、これすごくきれいなイメージだよね、これね。

西村 はい、坪内先生、お願いします。

坪内 僕の一番好きなのふたつ、90句目〈なんかもうどうでも良くて葱だらけ〉(会場、笑)、それから97句目〈宇都宮とは冬雲のきれいな街〉、宇都宮ってね、カバ、動物園があってカバがいる。わたるくんていうのが(会場、笑)。で、あそこラーメンの町だけどあんまり浮かばれないですよ、関東でも。ぜひ、宇都宮を宣伝するとき〈宇都宮とは冬雲のきれいな街〉を使いたいと思います。あの、こういう楽しいのをもっと増やしてほしいなあと思いました。

西村 ありがとうございます。それでは、最後に96番。これ、大石先生、お願いします。

大石 96番の作品は、あのう、クラシックなムードの漂った句ではないかなあ、作品ではないかなあと思いました。ええと、28句目〈釘頭打ち残したる海の家〉、その「海の家」っていうこのリアリティがとっても伝わってきます。29句目〈空瓶の干されて曇る夏深し〉、良く見てますね。それから、お若いというか作者の年代もわかる33句目〈西日灼くあしたのジョーの背表紙を〉、ここにこれが出てくるかっていう感じで。そしたらそんなの思っておりましたら37句目にカルピスが出てまいりまして、〈カルピスを少し濃くして秋隣〉、これももうすぐ秋だっていう、そこにカルピスを薄いんじゃないで濃くしてっていう、このなんていう、俗だけれども生活感が出て、古い調子だけれども普遍的なものを感じました。ほかに、48句目〈ひややかや裏向けて干す卸金〉、何か狙いが決まってるようですね。100句目〈雪のことそれから豆の鍋のこと〉、これは面白い句だと思いますね。

西村 はい、これで一応、予選通過者全員についての先生方のコメント、評価、ま、時間は足りませんでしたけど、ここに来ていただいた方の作品は全員について触れていただいたと思います。大変立派な作品を出していただいて、我々としては大変感謝いたしております。明日の俳句は皆さんの力によって切り開かれていくんだというふうに強く思っております。それでは、事務局お願いします。

事務局 それではここで10分間の休憩といたします。休憩の後、授賞式を行います。授賞式は4時15分から行いたいと思います。よろしくお願いたします。

(休憩)

事務局 大変お待たせいたしました。それでは授賞式に移らせていただきたいと思います。まず、芝不器男俳句新人賞の表彰を行います。名前を呼ばれた方は前へお進みください。

第3回芝不器男俳句新人賞 御中虫さん。

(会場内、拍手)

事務局 賞状の授与は、大石委員長にお願いいたします。

大石 賞状、芝不器男俳句新人賞、御中虫殿。あなたは、第3、第・・・なんか私の方が感激して・・・本当に・・・。あなたは第3回芝不器男俳句新人賞の選考会において応募作品を高く評価されその新鮮な感覚と豊かな将来性が本賞に相応しいと認められたのでその栄誉を讃えここにこれを賞します。平成22年6月20日、財団法人愛媛県文化振興財団、理事長、佐藤陽三。おめでとうございます。

(賞状を授与。会場内、拍手)

事務局 次に、賞金30万円の目録を授与します。授与は、財団法人愛媛県文化振興財団、三原常務理事にお願いいたします。

三原 大変おめでとうございます。

(目録を授与。会場内、拍手)

事務局 続きまして、松野町よりガラス工芸品を授与します。授与は、芝不器男記念館の名本館長にお願いいたします。

名本 これ、松野町のガラス工房で作成したものなんです。またあの、来てください。これを取りに。おめでとうございます。

(ガラス工芸品を授与。会場内、拍手)

事務局 松野町にあります「森の国ガラス工房 風音(かざね)」で、この新人賞のためにデザイン・製作されたものです。松野町からご提供を頂いております。作者は高柳理絵さん、作品名は「光の綾(ひかりのあや)」、木々からもれる多色の光や川面にはねる一瞬の輝き・・・。不器男が生きた時代とかわらぬ豊かな自然が松野にはあります。光がおりなす様々な表情をガラスに映しました、というコメントをいただいております。

(会場内、拍手)

事務局 それでは、御中虫さんから、一言、受賞のコメントを頂きたいと思います。お願いします

御中 あの、勘弁してください。ありがとうございます。

(会場内、拍手)

事務局 ありがとうございます。なお、新人賞は、副賞として、受賞者の句集を作成することになっております。今後、御中さんと打ち合わせを行いながら、本年12月の完成を目途に進めてまいりたいと考えております。それでは、新人賞を受賞されました御中虫さんに、盛大な拍手をもう一度お願いいたします。

(会場内、拍手)

事務局 それでは続きまして、選考委員奨励賞及び特別賞の表彰に移ります。大石悦子奨励賞を受賞されました成田一子さんは、残念ながら本日はご欠席でございます。従いまして、賞の伝達は事務局の方からお届けすることにさせていただきます。それでは、城戸朱理奨励賞、岡田一実さん、前へお願いします。ええ、齋藤慎爾奨励賞、堀田善宇さん。全員呼びいたしますので前をお願いいたします。対馬康子奨励賞、中村安伸さん。坪内稔典奨励賞、高岸容子さん。

(各奨励賞受賞者は前へ)

事務局 賞状の授与は、選考委員奨励賞につきましては、それぞれ選考委員の先生方に、特別賞につきましては、西村参与にお願いします。それでは城戸先生からお願いします。

城戸 賞状、第3回芝不器男俳句新人賞、城戸朱理奨励賞、岡田一実殿。おめでとうございます。

(賞状を授与。会場内、拍手)

齋藤 賞状、齋藤慎爾奨励賞、堀田善宇殿。おめでとうございます。

(賞状を授与。会場内、拍手)

対馬 賞状、対馬康子奨励賞、中村安伸殿。おめでとうございます。

(賞状を授与。会場内、拍手)

坪内 賞状、坪内稔典奨励賞、高岸容子殿。おめでとうございます。

(賞状を授与。会場内、拍手)

事務局 次に、選考委員奨励賞につきましては5万円の賞金の目録を、特別賞につきましては3万円の賞金の目録を授与します。授与は、財団法人愛媛県文化振興財団、三原常務理事にお願いします。

三原 おめでとうございます。

(副賞の目録を各受賞者に授与。会場内、拍手)

事務局 続きまして、選考委員奨励賞を受賞された皆様に松野町よりガラス工芸品を授与します。授与は、芝不器男記念館の名本館長にお願いいたします。

名本 おめでとうございます。

(ガラス工芸品を各受賞者に授与。会場内、拍手)

名本 これ、松野町で作っております。おめでとうございます。

(会場内、笑)

事務局 それでは受賞者の皆様から、一言、受賞のコメントを頂きたいと思えます。城戸朱理奨励賞、岡田一実さんからお願いします。

岡田 思いがけないことで、ありがとうございました。

(会場内、拍手)

事務局 齋藤慎爾奨励賞、堀田善宇さん、お願いします。

堀田 私も本当に思いがけなかったんですけど、あの、先生方には本当に深く、真摯に読んでいただき、本当に心から感激しております。ありがとうございました。

(会場内、拍手)

事務局 対馬康子奨励賞、中村安伸さん、お願いします。

中村 ええ、この度は非常に名誉ある賞をいただきまして、非常にありがたく思っております。あの、選考委員の皆様には、とにかく一生懸命読んでいただいたということにまず感謝しておりますし、あと、この会場に来て、いろいろ知り合いの方とか友人に祝福してもらって、とても感激いたしました。本当にありがとうございました。

(会場内、拍手)

事務局 坪内稔典奨励賞、高岸容子さん。

高岸 あの、この度は、素敵な賞と素敵な花瓶をいただきまして本当にありがとうございました。もうなんか、あの、昨日の晩から大阪、ちゃう、大阪を昨日の晩に出て、なんかこう訳わからんままにこうなっちゃいまして、何と申し上げたらよいのかわかりませんが、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(会場内、拍手)

事務局 ありがとうございました。それでは、新人賞を受賞されました御中様、今一度前へお越してください。

(御中虫さん、前へ)

事務局 最後に、各賞を受賞されました皆さんに、今一度、盛大な拍手をお願いいたします。

(会場内、拍手)

三原 ええ、それでは事務局からご紹介をいたします。一次選考通過者の方で、本日、この会場においでいただいた方を、お名前を読みあげますので、おいでたらご起立いただいたらと思います。ええと、花尻万博さん。和歌山県からでございます。

(花尻さん、起立。会場内、拍手)

三原 今の方、13番でございます。ええ次に14番の松井紀美恵様、熊本県から。あ、ちょっとお帰りになったかもわかりませんですね。

次に、18番の五十嵐義知さん。秋田県からでございます。

(五十嵐さん、起立。会場内、拍手)

三原 次に、20番の藤本陽子さん。広島県からでございます。あ、ちょっとお帰りかもわからんですね。

さらに、26番の倉持梨恵さん。埼玉県から。

(倉持さん、起立。会場内、拍手)

三原 え、ちょっと受賞者はとばさせていただきまして、次にですね、あのう49番の矢野玲奈さん。東京都から。

(矢野さん、起立。会場内、拍手)

三原 続きまして53番の澤田和弥さん。静岡県からです。

(澤田さん、起立。会場内、拍手)

三原 次に、63番の松尾清隆さん。神奈川県から。

(松尾さん、起立。会場内、拍手)

三原 その次に、64番の高勢祥子さん。神奈川県。

(高勢さん、起立。会場内、拍手)

三原 次に、69番の小林鮎美さん。東京都からです。

(小林さん、起立。会場内、拍手)

三原 それから、78番の増田盛治さん。香川県高松市。あ、お帰りになったですか。それから、84番の相原万美さん。あ、これは欠席ですね。これは本県の東温市からですが欠席ですね。

ええと、96番の畑結樹さん。福井県からでございます。

(畑さん、起立。会場内、拍手)

西村 漏れてる人いませんか？

三原 以上なんですけど、まだ、僕は漏れてるって方、おいでませんか？じゃ、以上の方が、わざわざおいでいただいた方でございます。どうもありがとうございました。またあの、次の新人賞の時もぜひ応募していただきたいと思います。どうも大変ありがとうございました。

(会場内、拍手)

事務局 以上をもちまして、授賞式を終わります。これで日程はすべて終了いたしました。皆さん本日は最後までご参加頂き、本当にありがとうございました。なお、芝不器男俳句新人賞は4年ごとの実施を予定しております。次回は、平成25年に募集の予定です。次回につきましても、引き続き、ご支援、ご協力を頂きますようお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

(会場内、拍手)

(閉会。解散)